

K2A-18 修監 馬生島寿 村藤崎島 Z32-B88

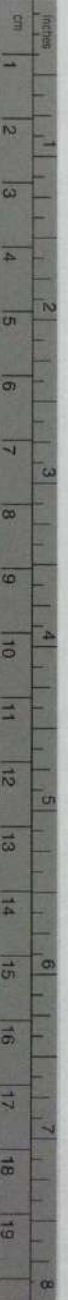
金の船

正月號



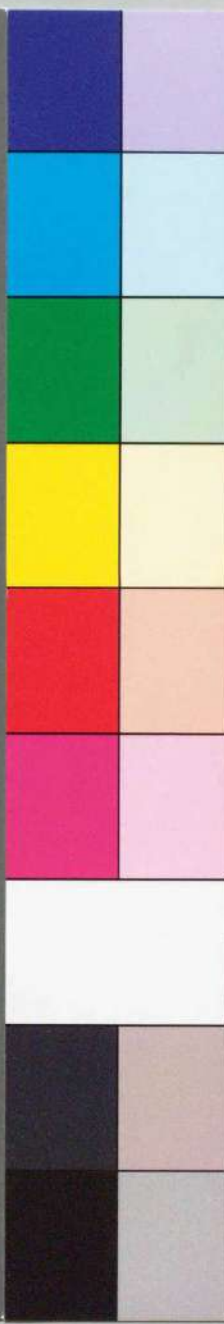
大附録たからさがし

第 卷
第 8.3 號
国立国会
印



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

G Y M

© Kodak, 2007 TM-Kodak

西條八十先生著

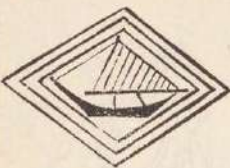
八版 静かなる眉

第一篇

■皆さんとおなじみ深い、西條先生が特に年若い皆で、若かりし日の思ひ出を、うたはれたる、美しく、優しい詩集です。殊に、巻末の『暁』には『金の船』の創刊號から、載りました、『ミニイとキニイ』『船頭の子』又は『燈火と手紙』

『母と昔』『帆船船』『鉛筆』等、童謡の最も純情無垢なるものゝみが澤山に、はいつて居りますから、是非皆さんに御愛讀なれんことを御すゝめいたします。

各冊 袖珍形 刷入天金表紙
三度刷 刷美木 塗料五段
定加名金 九十銭



サクマ式ドロップス

愉快！ 愉快！！
 矢よりも早い滑走
 どんなに寒い日でも
 滋養豊富でおいしくて
 風味の好いドロップスの
 用意を忘れ給ふな。
 食慾を増し消化を助け
 るドロップスの中でも
 最も理想的なのは

東京 久佐製菓株式会社

影芝居

私の心にくりかへす
 秋のゆうべの影芝居。
 泣いて別れたあの人も
 憎くて別れたあの人も
 喧嘩で別れたあの人も
 昔のまゝにひっそりと
 足音もなくしのび来て。
 私心の心にくりかへす
 秋のゆうべの影芝居。

發行 東京市神田區 南神保町 尙文堂
 所 東京 一三三四 堂

なごさる

先生の御名は皆さんのことと思ひます。清き少女の夢の美しかれど希ひれたる、これら哀々の想思をたれか涙なしに、讀み得るもの有りませうや？ 白百合の如き少女の机上を飾る良書として、此くきよき少女の机上を飾る良書として、此致します

▼長い間お待ちせしましたが漸く發賣することを得ました、お友達にも御話して下さい。

新版 寶石の夢

第二篇

少女畫 水谷勝先生著



年 新 賀 謹 奉

◆本年も相変わらず、日々繁昌の爲め手狭を感じ、お不便で御座いましたが、本年は西館も落成致しますから御愛顧の程願います。

◆五十銭の商品券、御客様方のお便利の爲めに五十銭の商品券を發行致しました處が、此れは重寶だとして非常な歓迎です。

◆◆ 日五十二 ◆ 日十 ◆ 日三 ◆ 日二 ◆ 日一 ◆ 日休の月一 ◆◆

東京 三越呉服店

新時代の要求に
應ずる特別提供

二葉恋



金 船 童 謠

吹込コレコー

十五夜お月さん
鶏 さ ん
四丁目の犬
人 買 船
つ ば め

本居みどり子

子供は小鳥と同じやうに本能的に歌を謡はらないではゐられない人間です

其子供達に眞に面白く聴かすべき歌を與ふるのが此レコードの使命です。



株式會社
日本蓄音器商會
神奈川縣川崎町

毎月新譜發賣
月報目錄進呈

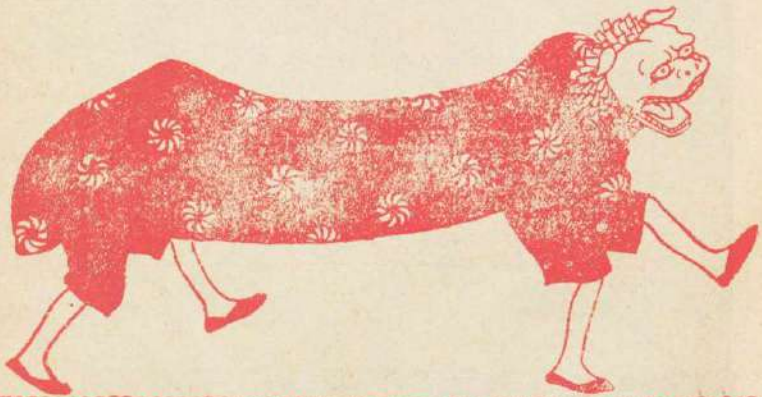


目次

おめてたり(長紙、石版刷)……………岡本歸一
 大男ツツの戦(日繪原色版)……………野口雨情
 鶏 さ ん(童話、曲話)……………西條八十
 鏡國めぐり(長篇童話)……………岡本歸一
 ときよ試し(繪はなし)……………長田秀雄
 鳥 追 船(童話)……………藤森秀夫
 山の叔母御(童話)……………窪田空穂
 壇の浦の戦(歴史童話)……………楠山正雄
 支那伊蘇普物語……………大木雄三
 のつべら坊主(童話)……………藤澤衛彦
 諸國傳説童話……………



熊になつた王女(童話)……………齋藤佐次郎
 魔の沼(童話)……………横山壽篤
 人 橋(童話)……………野口雨情
 雪すべり(ガソチ童話)……………船橋重一
 初音の鼓(童話)……………三宅房子
 廣い廣い世界へ(童話)……………楠山正雄
 鳩の小母さん(推虎童話)……………齋藤 溪泉
 ば つ た(推虎童話)……………鷹田守一
 雪 槍(童話)……………野口雨情選
 萬燈と纏(自由畫)……………山 本 鼎選
 幼時の思ひ出(雜方)……………克 輯 部選
 キューツピイ(幼年詩)……………若山牧水選
 挿 畫……………岡本歸一
 附 録……………岡本歸一
 雙六「寶さがし」(石版刷)……………岡本歸一





大男とジャツクの戦

岡本錦一畫

大男は目はやくジャツクを見つけて、
 「向ふ岸の草の中に人間が動いてゐるやうだ。お
 れの踵が踏んづけたがつてちく／＼する。」
 かういって大男は、たゞ一とまたぎに河を越し
 ていきなりジャツクを踏んづけようとしました。
 けれどもジャツクは、すばやく劍をふり上げて大
 男の踵につつまみました。

（「廣い廣い世界へ」の六十八頁を御覽なさい）



鶏さん

本居長世曲作



3 3 1 1 | 7 7 6 7 | 1 3 1 6 | 7-0 |

ひよこの かかさん ははごりさん



2 2 3 3 | 4 4 6 4 | 3 3 1 6 | 7-0 |

とりやにかはれてゆきました



3 3 1 1 | 7 7 6 7 | 1 3 1 6 | 7-0 |

おはさむこさむでさむいのに



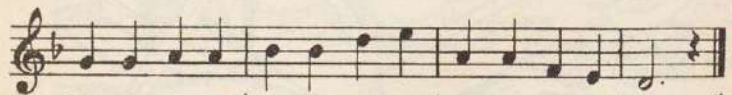
2 2 3 3 | 4 4 6 4 | 3 3 1 6 | 7-0 |

ひよこをわかれてゆきました



3 3 1 1 | 7 7 6 7 | 1 3 1 6 | 7-0 |

ひよこにわかれたははごりさん



2 2 3 3 | 4 4 6 7 | 3 3 1 7 | 6-0 ||

とりやでさびしくくらすでせう

鶏さん

野口雨情

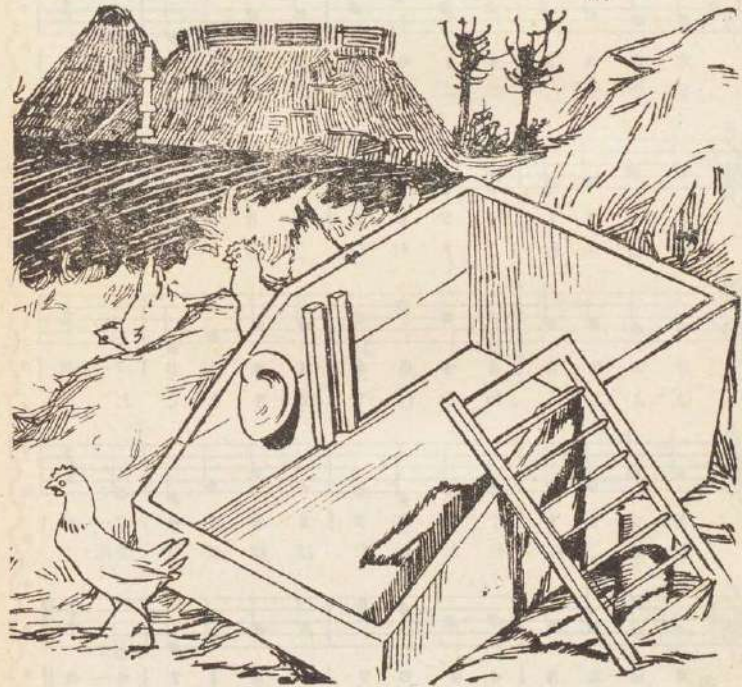
雛の母さん

親鶏さん

鳥屋に買はれて

ゆきました

大寒 小寒で



寒いのに

親なし雛に

なりました

雛に別れた

親鶏さん

鳥屋で淋しく

暮らすでせう





鏡國めぐり (長篇)

西條 八十

(發端) 鏡の家

たゞひとつ確かなことは白い子猫の方はこのお

話にまるでかゝりあひが無いと云ふこと
 です。なにもかも皆三毛猫のせいでした。
 なせと云ふのに、白はそのとき十五分も
 まへからお母さんの猫に顔を洗つてもら
 つてゐたのですもの。さうやつてヂツと
 おとなしくしてゐた者が、いたづらなぞ
 をするわけがありません。

親猫のたまが子供たちの顔を洗つてや
 るのには、まづ片方の足で子猫の耳のところをお
 さへて下にねかし、それから、もう片方の足で鼻
 づらから顔おゆうを逆にこすり上げるのでした。
 今もちやうどさうやつて一生けんめいに白の顔の
 お掃除をしてゐました。白はすなほにねたなりに
 なつて、「お母さんのすることにはまちがひは無
 い」と云ふやうな顔をして、喉をころ／＼云はせ

てゐました。

ところが三毛の方はもうお午まへ、とつくの昔
 に顔のお掃除がすんでゐたので、退屈さうに、あ
 やちやんが腰かけてゐる大きな肘かけ椅子に自分
 も並んでチヨコナンと坐つてゐました。

あやちやんはさつきから何だかわからないひと
 り言を云ひながら、せつせと赤い毛糸の球をから
 げてゐました。そのうちあたりがあんまり静かな
 のでウト／＼ねむけがさしてきて、糸をからげる
 手がしばらくお留守になりました。このすきを見
 て、いたづらな三毛はちよい、ちよい、とチヨツ
 カイを出して毛糸の球を下へころがし落してしま
 ひ、自分も飛びをりてそれを追かけ追かけしてゐ
 るうちに、たうとう残らずほぐしてしまひました。
 さうして椅子の足のところにいちめんこんぐら

かつた赤い毛糸の中へもぐり込んで、今
 度は自分のしつばにじやれ始めました。
 ポツカリ眼をあいたあやちやんは驚い
 て、

「まあ、いけない三毛ちやんだこと！」
 と云ひながら、子猫を抱
 きあげて、お仕置のかはりに
 チヨイと頬すりしまし
 た。それから親猫のたまの
 方を向いて、

「たま！ おまへのしつづけ
 が悪いからだよ！」
 と、出来るだけこはしい顔
 をしてにらめましたが、直
 ぐあとから自分でニコ／＼





笑ひだしてしまひ、もう一べんこんぐらかつた毛
糸と三毛ちゃんを一しよに抱へて椅子の上へあ

き込みました。
あやちゃんは面白さうにソツと三毛の顔をのぞ

がりました。

そこで又もあやちゃんは、毛糸の球
をまきなほしながら、三毛に話してゐる
んだか、自分に話してゐるんだか、さつ
ぱりわからないお話をはじめました。

「三毛ちゃん、おまへ明日は何だか知つ
て？」

と、あやちゃんがさきました。

「明日はソラあの日曜よ。お天気だつた
らお父さまとお母さまとうめやと皆で淺
草の観音さまへ行くのよ。おまへ観音さ
まへ行つたのがあつて？ さう、さう夫よ
りかおまへ日曜つて何だか知つて？」

三毛はさつきの失敗にこりたか、おとなしく、あ
やちゃんの膝へのつて、あやちゃんの指のあひだ
で毛糸がブラ／＼揺れるのをヂツと眺めてゐまし
た。

「アラあたし何を訊いてたんでせう。三毛ちゃん
に日曜なんかあるはずが無いわね。毎日學校へも
行かすねてばかりゐるんですもの。それに観音さ
まへだつて行けないわ。あすこは人込みですもの。
ゆけばおきみんなに踏まれてしまふわ。それに電
車だつて通つてゐるし、さう／＼そんなら、はじ
めから電車へ乗つて行けばいいわね。けれど三毛
ちゃんに切符が買へるかしら？ でもをかしいわ
ね、ホ、ホ、ホ、ホ、ホ」

あやちゃんは、三毛ちゃんがひとりで電車へ乗
つて切符を買つたら、どんなに車掌さんがおどろ

くだらうとおもつて、思はずふきだしてしまひま
した。

が、その途端にチラと玻璃窓の外を見ると、あ
やちゃんの顔は今度は急にくもつて悲しさうな色
になりました。

「すゐぶんひどく雪が降つてゐるのね。これちや
とても観音さまへ行かれないわ。それとも明日ま
でに止むかしら。ねえ、三毛ちゃん、もしもおま
へが今日観音さまへ行くのだつたら、かせをひか
ないやうにかう云ふ風に襟まきをして……」

と云ひながら、あやちゃんは子猫の首つ玉へ毛
糸を二巻き三巻き巻きつけて、どんな恰好になる
か見ようとしました。

けれど三毛がいやがつてあばれたので、赤い毛
糸の球はもう一べん下へころがり落ちて、またく



るくほどけてしまひました。

『さあ、もうきゝませんよ。』
と、あやちゃんはたうとう球の方はあきらめて

しまつて三毛に向ひ、

『おまへ見たいにいたづらばかりすると、窓をあけて雪の中へ抛りだしてしまつてよ。』

と小さな拳固を見せておどかして、

『いゝかい、今お前のした悪いことを勘定してやるから。第一、おまへは今朝たまに顔を洗つてもらひながら二度キユウつて云つたでしょう。なぜあんな聲を出すの。いゝえ、あたしチャンと聞いてましたよ、え、なに？』

と、さも三毛の言葉がわかるやうなふりをして、

『なに？ お母さんの前足が眼の中へ入つたんだつて？ それはおまへが悪いのよ。ヂツとして眼をつぶつてさへおればいゝのに、そんな眼を明けたりなんかするからよ。云ひわけしたつて、だめ、だめ。その次にお前はチョンにやつた牛乳のお皿



をしつぽの先でひつくりかへしてしまつたでせう。なんておまへは思ひやりのないことをするんでせう。チョンはあの時兄さんのお供をして遠

くまで行つて、めちやめちやに喉がかわいてゐたんぢやないか。それから第三番目が、ホラたつた今、あたしの見てゐない間に毛糸の球をのこらすほぐしてしまつたことよ。これだけでももう悪い事が三つもある。それでおまへはまだ一つも罰をうけてゐないのだ。で

も罰はのこらす水曜日まであづかつといてあげてよ。ほんととはあたしの罰もそれまでお父さんにおあづけになつてゐるんだから。」

こんな風にあやちゃんは子猫を相手に際限なくおしやべりをしてゐましたが、そのうちふと思ひついたやうに、「三毛ちゃん、おまへトランプ知つてる？ あれ、笑つちやいけないわ。あたしまじめで訊いてるんぢやないの。だつて昨日あたしたちがトランプをしてゐたら、おまへさもわかるやうな顔をして見てゐたぢやないの。そしてわたしが『きりふ請求』といつたとき、おまへゴロ／＼いつたぢやないの。あの時あたしはうまく勝ちつづけたつたのよ。——ぢやあこれかふあたりでトランプをして遊びませうね。』

あやちゃんはかう云つてあたりを見まはしまし



(ちよつとこゝで皆さんにおことわりをしておきますが、あやちゃんはこの假りにと云ふ言葉を使ふのが癖で、つい一昨日も姉さまとこのことなが議論をしたのです。それはちやうど學校ごつ

たが、あいにくをこらにトランプの札が見えなかつたので、そのま三毛に向つて、

「では三毛ちゃん、假りに——」

こをしてゐる時で、あやちゃんが「では、かりにあたしが残らすの男の生徒になりますから、お姉さまは女の生徒におなりなさい」と云ひ出したのがはじまりで、きちやうめんな事の好きなお姉さまは、あたしたち二人きりで一度にそんなおほせいの生徒にはなれないと反對したのです。もちろんこれはあやちゃんの方が負になりましたが、このほか或るときなどは、お家のばあやの耳のそばへ行つて大きな聲で、「ばあや、かりにあたしはおなかのへつた狼になるから、おまへは骨におなり」とだしぬけにいつて、ばあやをひどくびつくりさせてしまひました。

お話が横へされましたが、あやちゃんはこの時、三毛に向つて、

「では三毛ちゃん、おまへかりにスベートの女王

におなり。スベートの女王はマイナス五點なのよ。よくつて？ では右手をあげてこの——」

と、云ひか

けて、あやちゃんは頭についてゐた青いリボンをとつて、三毛の手に持たせるやうにして、

「さ、これを花のかほりに持つと、そつくり女王に見えてよ。さ、やつてごらん、いゝ子だから。」



にかゝはらず、リボンは、直ぐにボタンと、三毛の手から下へ落ちてしまひました。あやちゃんは

ひどく癩癩を起して、三毛のえりくびを撮んで椅子のそばの大きな鏡の前へぶらさげました。

「これからいゝ子になつて、すなほにあたしの云ふ事をきかないと、この鏡のお家へ入れてしまふからいゝ。三毛ちゃん、おまへそれでもかまはな

いの？」

と、あやちやんはたしなめるやうに云つて、
 「さあ、それとも黙つておとなしく聞いてゐるなら、あたしが鏡のお家の様子をすっかり話してあげるよ。まづ鏡の向ふにもお部屋があるのよ。それはこのお座敷とそっくりなんだけど、たゞ右左があべこべなのよ。椅子へのつてごらん、何もかもこのくらゐ見えるから、たゞストープの奥のちよとしたところが見えないだけよ。まあ、あすこの奥が見えるとはんとにいゝんだけど。あたし鏡のお家にも、冬中火が燃えてあたるやうになつてゐるのかどうか見たいわ。」

「三毛ちやん、おまへ鏡のお家へ入つて住みたいと思ふ？ でもあつちの家では、おまへに牛乳をくれるかしら。鏡のお家の牛乳はこゝほどおいしい

くないかも知れないわ。——ホラ、かうしてこつちのお座敷の扉をすっかりあけると、鏡のお家の廊下がよく見えるだらう。いま見えるだけでは、こつちの廊下も向ふの廊下も變りないやうだけど、あすこを通つて奥へ行つたら、どんなに違つてゐるか知れないとおもふわ。ねえ、三毛ちやん、かりにこれなりスツと鏡のお家の中へ入つてゆけたら、どんなに面白いでせうね。きつと、中にはきれいな物や面白い物がたくさんあつてよ。まあ、かりにこの鏡の冷たいところが、レースのやうな柔かなものになつて、手でおすとそれなりズツとぬけて中へ入れるやうだつたら。——ほんたうにどこにか入る口は無いのかしら？」

「あやちやんは三毛を相手にして喋つてゐるうちに、次第にほんたうに鏡のなかへ入つてみたくな



「アラ、變だ

わ！ 鏡かやは

らかくなつた

わ！ おや、おや、

おや、おや！」

と、あやちやん

が驚いて叫ぶと

まもなく、身體

はそのキラ／＼

する譟のなかを

スツとぬけて向ふへと入つてゆきました。

りました。さうして小さい掌で一生けんめい、あつちこつち鏡のすべつこい面を撫でてゐますと、そのうちどう云ふかげんか鏡が鉛のやうにまた露のやうにフツ／＼したものになりました。

さうして次の瞬間には、あやちやんは珍らしい、鏡の中のお室に、ひとりぼつちチョコンと立つてゐました。(あやちやんはこれからどんな不思議を見るでせう。)(つづく)



二
ある時、年も上で春もすつと高いその癖はがりんぼな川島君が仲間に入りました。「そんな事はがる奴があるもんか」とからむばかりをして居ましたが話がつんでくじを引いて見ると川島君が一です。さア、さうなると仲々のきませんでした、しまひに負け惜みいひ乍ら出て行きました。僕と進君とが確かに行くかどうか見届けに反対な廊下から抜き足さしあして倉の前まで来ました。川島君は、がたびし云はせ乍らやつて来ました。



どきよ 試し

あが本きい

一
僕等の十四五のとき、冬の晩によく度胸試しをやりました。それは座敷にたつた一本の蠟燭のまはりに集つて、おそろしい魔物やこはいお化けの話をした後で、くじ引きで鼻をつま、れども分らないやうな眞暗なながい廊下を通つて、倉の二階へ何か物をとりに行くのです。それは、するぶんこはい事です。



四
 僕は雑巾をぶつけたら、こは
 がりんばな川島は、元来た方へ
 逃げて行くだらうと思ひました
 が、川島君が面食つて僕等の方
 へとんで来て、ぶつかるなりキ
 ャツと云ふし、實を云ふと僕等
 もおつかなびつくりだつたの
 で、ワツと云ひ乍ら逃げて来た
 のです。川島君はぶる／＼ふる
 へて居ました。
 餘り大きな聲を出したので家
 の人達もとんで来て
 僕うんと叱られちや
 つた事があります。



三
 僕は一つおどかしてやらうと
 思つて臺所を通る時ぬれた雑巾
 を持つて来ました。
 川島君がだん／＼やつて來ま
 した。丁度僕達のそばへ來たや
 うでしたからふいに『ニャオ』
 と云ひながら雑巾を打ツつけま
 した。
 ベチャと當つた音がするとワ
 ツと云つたかと思ふと、僕等に
 打つかつて、キヤツと大變な聲
 を出してとんで行きました。僕
 等二人はひつくり返つて、いや
 ツといふ程頭をぶちました。



鳥追船

長田 秀雄

むかしむかし、薩摩の國の日暮らしの里と云ふところに、一人のお大名がありました。このお大名と隣國のお大名との間に長い間争ひの種になつてゐた土地がありました。どうしても二人の間は、和解が出来ませんでしたから、そのお大名は、これは一層都に上つて公方様に訴へて、裁いて頂いた方がよいとかう考へつきました。そこでお大名は、いろ／＼その土地に付いての地圖やら書類やらをまとめて、遠い都へ上る事になりました。

お大名には、まだ若い奥方と、花若と云ふ可愛いお見さまがありました。花若は、そのとき、やつと生れたばかりでした。

いよ／＼出發の前の晩になりましたので、お大名は奥方を招んで、

「奥や、俺は公方様に訴訟するために、明日朝早く

都へ向つて旅立するから、お前は、よく氣を付けて

留守番をしてゐておくれ、後の事は、すつかり家來

の左近の尉に委せて行くから、お前は、左近の尉を

手頼りにして、私の歸つてくるのを待つてゐればい

いのだ。左近の尉はお前も知つてゐるとほり、なか

なか忠義な奴だから、決して家の爲、お前たちの爲

めに悪い取計らひはしない筈だ。何と云つてもこの

訴訟は長びくだらうから、そのつもりでよく氣を付

けて花若を育て、貰はなければならぬ。やがて、公

方様のお裁きで、あの土地は家の物になるだらう。

その時は喜び勇んで歸つてくるから、お前も身體を

大切に、この家を守つてゐてくれなければ困

る。」と、かう柔しく云ひきかせました。

まだ、年若な奥方は、杖とも柱とも頼む夫に別れ

るのが、心細くて悲しくて仕方がありませんでした。

可愛い、花若をしつかり抱きしめて涙ながらに夫の

云ふ事をきいてゐましたが、やがて、

「殿様、お留守は必ず氣を付けて致しますが、その

訴訟は、どの位の間おか／＼り遊ばすおつもりで御座

いますか。」とかう訊ねました。お大名は若い奥方の

いぢらしい心根を思ひやつて、可愛さうで耐らなく

なりましたから、わざと愉快さうに笑つて、

「何もさう心細がる事はない。長くかゝると云つて

もせい／＼二年か三年だ。この花若がよろ／＼歩き

出して片言を云ふやうになる頃は、きつと歸つてく

る。」と、云ひました。

奥方は何とも云はないで、涙にくれて俯向いてし

まひました。お大名は、左近の尉と云ふ家來を招び

ました。そして、

「さて、左近の尉、兼々云ひきかしてあるとほり、

いよ／＼私は明日の朝都へ向つて旅立をするから、

後の事はよろしく頼む。殊に奥はまだ年若でもあり

乳呑兒を抱へてゐるので、大へん心細がつて仕方がないから、お前は時々慰さめてやつてくれ。頼んだぞ。」と嚴重に命けました。

そして夜が明けると、大せいの家來をつれて、都の方へ旅立つてしまひました。秋が深くなつて、稻の穂が重くうな垂れてゐる頃の事でした。

二

花若は、まだお父さんの顔を見知らない位でしたが、留守になつてから、お母さんの膝元でだん／＼育つて行きました。

左近の尉はなる程、忠義な家來でした。一日領地の事を、かれこれと世話をして、夜になると、きつと、一度づつ、奥方のところへやつて来ました。そして、四方山の話から、都の訴訟の工合などお話ししては花若をあやして歸つて行きます。

ところが、不幸な事には、その頃都の中で戦が起

つて、公方様はなか／＼遠國のお大名の領地の裁判などしてゐる暇はありませんでした。月日のたつのは早いものです。日暮らしの里で、奥方や左近の尉が、都の戦の噂を風のたよりに聞きこんで、胸を痛めてゐる内に、早くも三年目の秋が来てしまひました。花若は、もう四つです。この間まで這ひまはつてゐたと思ふ内に、もうすん／＼立つて歩くやうになりました。片言ながら、物も云へるやうになりました——そして、奥方の顔を凝平つと見ては、にっこり可愛い笑顔をするやうになりました。

奥方は約束のとほり、もうお大名が歸つてくるだらうと思つて、左近の尉とも、その話ばかりして待つてゐましたが、秋がくるとも冬がきても都からは歸つてくるのは愚な事、たよりさへ、ありませんでした。

「もう、今年も暮れてしまふから、殿様はきつと、

來年の春、目出度くお歸りになるだらう。」と、奥方はある日左近の尉におつしやいました。

年がくると四年目の春が來ましたが、たうとうお大名は歸つて來ませんでした。夜になると、添寝してゐる奥方の乳房をおもちやしながら、花若が、「お母さま。家のお父さまはどうして歸つていらつしやらないの。」と訊きます。

「お父さまはね、公方様の御用がお忙がしいから、歸つていらつしやらないの。」

「ちや、何時になつたら、お歸りなさるの。」
「もうちきに歸つてゐらつしやるからね。花若も、それまでに柔なしい賢い兒になつてお父さまに賞められるやうにしなければいけませんよ。」と、かう云つて、奥方は、しつかり花若を抱きしめました。

三

花若は六つになりました。どうしたのかお大名は



まだ都から歸つてきません。人の噂では都で大病を
わづらつて死んだとも云ひ、また、生きてゐるには
ゐるがすつかり路用の金をつかひ果たして、國へ歸
る事も出来なくなつたのだとも云ひます。

しかし、奥方はそんな噂は信じませんでした。そ
れはみんな意地の悪い隣國の大名が云ひふらすの
だ。いまに見るがよい。目出度く裁判に勝つて、殿
様は家に歸つていらつしやるからと、かう人にも云
ひきかせ、自分でも信じてゐました。

しかし他人はさう云ふ譯には行きません。數多い
召使ひの者どもは、いくら奥方から云ひきかせられ
ても、お大名の歸りがあんまり遅いので、段々、心
の内で疑ひを抱くやうになりました。そして、何時
となく隣國の方からきこえてくる噂を信じるやうに
なつてしまひました。

落目になると人は薄情な物です。召使ひの者は一

三千町の分限者ぢや。

と、唄つて歩いてゐたのに、此頃は、もうそんな唄



をうたふ者もなくなつてしまひました。苦勞にやつ
れた奥方は、すつかり年を取つて、其の美しくさは

人逃げ二人逃げして、何時の間にかみんな居なくな
つてしまひました。すると、これ迄忠義をつくして
ゐた左近の尉が、段々、奥方の處へ來なくなつてし
まひました。來ないばかりではありません。これ迄
すつかり信用して何もかも委せてあつたので、心の
底に腹黒いところのある左近の尉は、人知れずお大
名の領地をかすめて、何時かしら、近國には及ぶ者
もないやうな大福長者になつてゐました。奥方のと
ころから逃げ出した召使ひたちは、みんな左近の尉
の家來になつてしまつたのです。

かう云ふ工合で、お大名の家は、見る影もなく零
落してしまひました。以前はよく里の小供たちが、
手を打ちはやして、

日暮らしどのを見いさいな。

田が千町、畑が千町

山が千町、やあれ、やれ、

何處へやら、見る影もないお婆さんになつてしまひ
ました。

屋根の瓦も落ちて、その間には雀が巢を
くつてゐます。軒の破れからは、月がさび
しくさし込んで來ます。お庭には、草が一
バイ茂つて、花若の丈くらの高さの伸び
てゐます。奥方と花若とは、悲しく淋しく、
その破屋の内で暮らしてゐました。

心待ちに待つてゐるお大名のたよりは、
年の暮れが近づいても、新しい春が來て
も來ませんでした。その内に里の小供たち
は、

左近の尉を見いさいな。

田が千町、畑が千町

山が千町、やあれ、やれ、

三千町の分限者ぢや。

と、唄つて、このお大名の破屋の築地の外を通るやうになりました。凝乎と悲しみを耐へて、その唄をきいてゐる二人の心はどんなでしたらう。

四

左近の尉は、金持になるにしたがつて、段々圖々しくなつてきました。

ある時、突然にお大名の破屋にやつて來ました。

そして奥方に向つて、

「こら女、もうお前の亭主は歸つて來やしない。何時まで、そんな貧乏な思をして待つてゐるのだ。さうやつてゐる内には、喰ふ物もなくなつてしまつて、どしどしつまりは二人とも餓死をしなければやなるまい。俺は悪い事は言はない。それよりか俺の家へ來て、俺の女房になつたらどうだ。昔の召使の者からまた奥方さまとあがめられて、榮譽榮華の仕放題だ。」

田が千町、畑が千町

山が千町、やあれ、やれ、

三千町の分限者ぢや。

と、唄ひはやして通つて行きました。左近の尉はさも心地よさうに、からりと笑つて出てゆきました。

五

花若はたうとう十歳になりました。父に似てか、母に似てか、それはく美しくい器量でした。そして、小供に似合はず、利發な心を持つてゐました。

お父さんのお大名は、どうしたのか、まだ歸つてきません。氣丈なお母さんは、あらゆる困難と戦つて、やうやくこれ迄花若を育て、きました。家にある道具は勿論、何から何まで賣りつくして、もう、いよ／＼食べる物もなくなつてしまひました。

物淋しい秋の初めでした。二人の住んでゐる破屋

と、にや／＼笑ひながら云ひました。

それをきくと、奥方は胸が煮えくりかへるやうな氣がしました。がしかし、うっかり怒りつけでもしようなら、それこそ、どんな難題を云ひかけるかも知れないと思つて、凝乎と胸をさすつて耐へてゐました。

左近の尉はまた言をつとけて、

「さうすりやお前ばかりではない。この花若も苦勞しないですむんだ。」

と、かう云ひました。奥方はただ俯向いたきりで、何とも答へませんでした。

「ふむ。返事がない處を見ると不承知とみえる。よく／＼この女は貧乏が好きで性だ。」

と、かう云つて、左近の尉は歸りかゝりました。その時築地の外で、里の小供たちが、

左近の尉を見いさいな



から、一歩外に出ると、左近の尉の田や畑が美しく實つてゐました。

お母さんは花若をしつかり抱きしめて、涙をばらはらとこぼしました。そして、

「花若や、もういよ／＼私とお前とは餓死をしなければならなくなつたんだよ。都にいらつしやるお父さんが、歸つてさへ下されば、こんな事はなくつて濟んだんだが、どうしたのか、お父さんは何時まで待つても歸つてはいらつしやらない。歸つていらつしやらないばかりではない。おたよりさへないのだよ。これ迄、私は、意地の悪い隣國の大名が、云ひふらすのたとばかり思つて辛抱してきたが、お父さんはやつぱり都で、お亡なりになつたのかも知れない。もし、お亡なりになつたのなら、かうして何時までお待ちしてゐても仕方がない。どうしたらいいだらうねえ。私にもう思案も何もつきはてしまつ

たよ。」
と、泣々掻口説きました。

黙つてお母さんの云ふ事を凝平と聞いてゐた花若は、この時口を開いて、

「お母さん、お母さんのお心は花若にはよく分ります。しかし、私はお父さんがお亡なりになつたとはどういふ思へません。お母さん、お父さんはきつと歸つていらつしやいますよ。それ迄の間は、私か何とかして食べる物だけ稼いで來ますから、どうか、そんな情ない事を考へずゐて下さい。」
と、かう云ひました。そして大きな涙をばら／＼こぼしました。それを見ると、お母さんはもう耐らなくなつて、聲を上げて、そこに泣きふしてしまひました。(つゞく)

(あはれな花若母子はどうなりますか、次號をお読み下さい。)



山の叔母御

藤森秀夫

山の叔母御は
つめたい叔母御。

松の下まで
來は來たが
後へもどろか
日はくれる。

門の小人に
たづねたら、

落葉の杖に

銀の笠

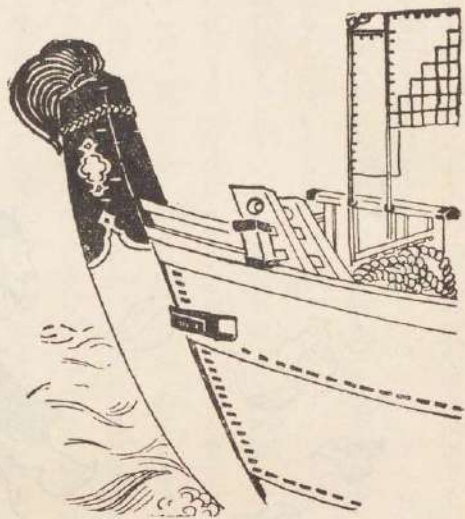
簀着て昨夜

山奥へ。

(信州の方言に初詣の事を山の叔母御と申す)

壇の浦の戦

窪田空穂



ました。
源平の二軍は、今はこゝで、舟軍をすることになりました。場所は、豊前の田浦門司が關と長門の壇の浦赤間が關のあひだの海峡で、時は、元暦二年、三月（舊曆）廿四日の朝の二時からといふことになりました。

源氏の兵船は三千餘艘、平家は千餘艘、それに唐船（支那風の船）が少しばかりありました。

源氏の船のそんなに多いのは、四國、九州の者で、これまでは平家の恩をうけてゐたものが、だん／＼

一 讃岐の屋島で敗れて、海へ漂つた平家の一門は、一と月あまりして、長門の引島へ着きました。

義経も、後を追つて長門まで行き、そこで、山陽道を攻めくだつた兄の範頼の軍勢といつしよになり

に平家に反いて、源氏の方へ附いて來たからでした。

二

合戦ときまつた日、軍の前に、義経と梶原とは同志討をもしかねない喧嘩を始めました。陣捕ひの時、梶原は進み出て、

「今日の先陣は、景時にさせて下さいまし。」といひますと、義経は、

「義経といふものが、無かつたならな。」と、斷りました。

「それは聞えないことです、貴方は大將軍ですもの。」

「それは思ひも寄らん。大將軍は鎌倉殿（頼朝）だ。義経は軍奉行で、お手前たちと同じ身分だ。」

梶原は、先陣を望みかねてしまつたが、側へ向いて、此の方は、生れつき、侍の主人にはなれない方

だ。」と獨語をいひました。すると義経は、

「お手前は、日本一小癩は男だ。」といつて、刀の柄へ手をかけると、梶原は、

「何うなさらうといふのです。手前は鎌倉殿より外には主はないんですからね。」といつて、これも同じやうに刀の柄へ手を掛けました。

それと見ると、梶原の息子たちや家來は、梶原を取り圍む、義経の家來は、義経を取り圍んで、切り合ひが始まらうとしました。が、義経には、三浦義澄が取りつき、梶原には土肥實平が取りついて、

「これ程の大事を前にして、同士討などすると、敵に軍勢が附いてしまひます。それに鎌倉殿に聞えてもおだやかではありません。」と止めたので、義経は心を静めました。

三

源平兩軍の軍船は對陣しました。双方の距離は三十町ばかりでした。この、門司、赤間、壇の浦は、潮の早いところで、潮が絶えず落ちて行きます。平家の船は、その潮に向つて、押し流される形になつてゐますが、源氏の方は反對に、潮に乗つてゆくやうになつてゐたので、そこが得に見えました。陣を對はせると、双方とも関の聲を擧げました。その聲は天の上まで轟き、地の底までも聞えるやうでした。

四

関の聲が静まると、平家の方では、平知盛は大聲で、身方の軍勢を勵しました。

「世界に並ぶ者のない勇士でも、運が盡きれば是非もない。しかし名譽はきつつけるな。東國の者に弱みは見せるな。今更命を惜むな。十分に働ける者ども。」

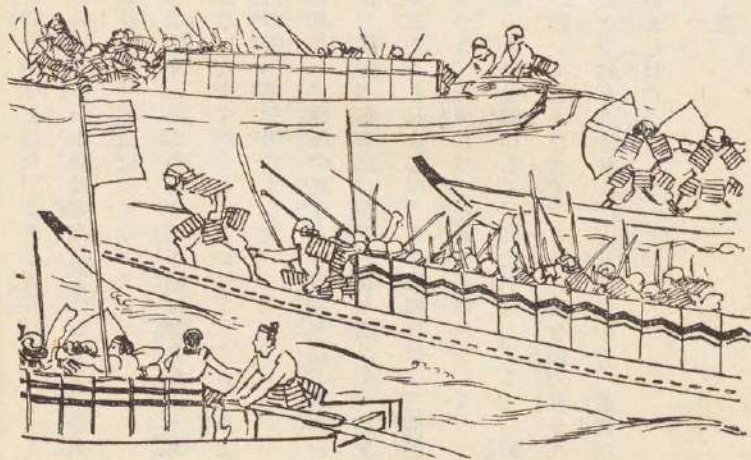
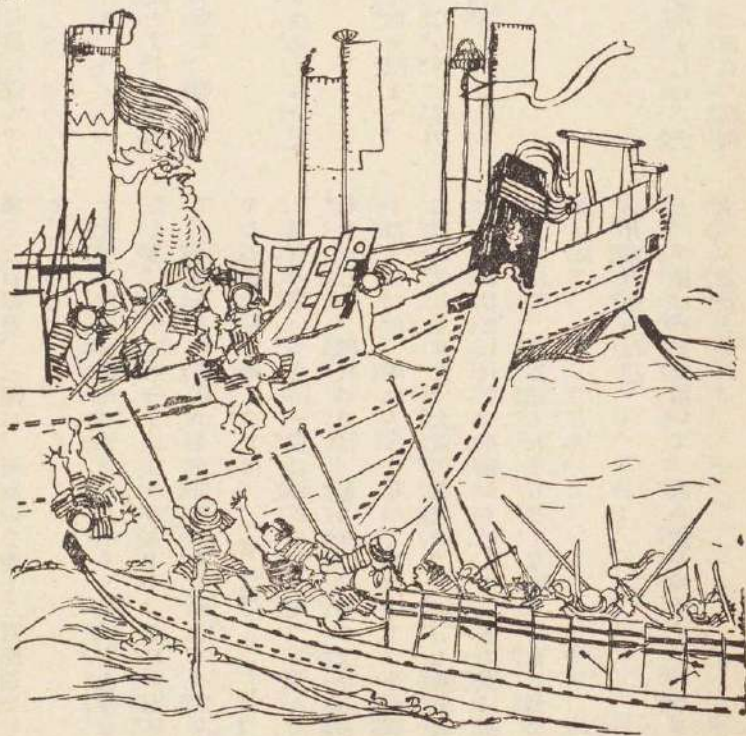
それだけが望みだぞ。」

續いて上總の悪七兵衛も進み出て「關東の者どもは、馬の上の軍は知つてゐても、船での軍は少しも知らん。今はまるで、魚が木に上つたやうなものだ。一人々々海に漬けて呉れよう。」

越中の次郎兵衛も續いて、一同じく取組むなら、大將の源九郎(義經)に取組みたまへ。彼奴は、丈の低い、色白の、反齒の男だから、直ぐに眼に着く。だが、よく鎧を着がへるから、ちよつとは見分けが附かんかも知れん。」

さう云ふと悪七兵衛は又、

「あんな小僧が何だ。たとひ心は強



くても、何れ程のことがあるものか、片脇に挟んで海へ入れて呉れよう。』といひました。

知盛は小船に乗つて、宗盛の船へ行き、

『身方の兵が、今日は威勢がよく見えます。しかし、阿波重能だけは心變りがしてゐるやうです。切つてしまひたいと思ひます。』

知盛がさういふのに、宗盛は、さうは見えないと云つて許しませんでした。

知盛は、呼ばれてそこに來てゐる重能を睨まへ、彼奴の首を落したいものだと思つて、刀の柄を碎ける程に握りしめてゐましたが、宗盛が許さないもので、それは出來ませんでした。

五

平家の方は、千餘艘の船を三つに分けました。先陣は、山鹿秀遠で、五百餘艘でした。二陣は、松浦

源氏も今は一所懸命になつて防ぎました。双方とも、顔を横へ向けることもせず、命を棄てた氣になつて戦ひつゞけました。

六

その時でした、今まで平家に附いて戦つてゐた阿波重能は、俄に平家にそむいて、源氏についてしまつて、平家の方へ弓を引き始めました。

知盛はそれを見ると、

あゝ、あの時に切つてしまへばよかつたものを。』と後悔しました。

平家の方では謀をして、立派な者の乗つてゐさうに見える唐船へ、わざとつまらない者ばかりを乗せておき、源氏の方で、それを攻めに來たらば、取り圍んで射ようとしてゐましたが、重能が敵へ附いてしまつたので、その謀は知られてしまひました。

三二
黨で三百餘艘、三陣は、平家の公達で二百餘艘でした。

先陣の山鹿秀遠は、強い弓を引くこと、上手なことで、九州で第一といはれる人です。それが大將で、弓の上手な者ばかり五百人を選び出して、並んでゐる船の艫と軸に立たせて、一齊に射させました。

五百の強い矢は、一度に源氏の方へ向つて飛んで行きました。源氏の方は、船も多く、弓の上手も多くゐましたが、離れ／＼になつて射るので、それ程には目立ちません。大將の義経は、その日も真先に立つて戦ひましたが、平家からのこの一齊の矢に射立てられて、桶も鎧もたまらなくなつて、亂れ始めました。

『身方の勝らだ。』

と、平家は威勢が附いて、攻め鼓を叩き立て、喚ぎ立て、戦ひました。

源氏の方ではそれと知ると、今は大將の乗つてゐる船ばかりを攻めて來るので、今までは反對に、平家は防ぎきれなくなつて來ました。それに又、重能が背くと、四國や九州の者で、これまで平家に附いてゐた者が、揃つて平家に背いて源氏に附いてしまひ、急に此方を攻めて來るので、平家の兵船は今では亂れてくづれて來ました。平家は、彼方の岸へ船を附けようとすると、潮が早くて寄せることが出來ない。此方の岸には、源氏の陸の兵が矢の先を揃へて待つてゐます。今はもう何うすることも出來なくなりませんでした。

その亂れくづれたのに附け込んで、源氏の兵は平家の船に乗り移つて、第一に船頭を切り殺してしまつたので、今は船を動かすことさへも出來なくなつてしまひました。(つゞく)

支那伊蘇普物語(六)

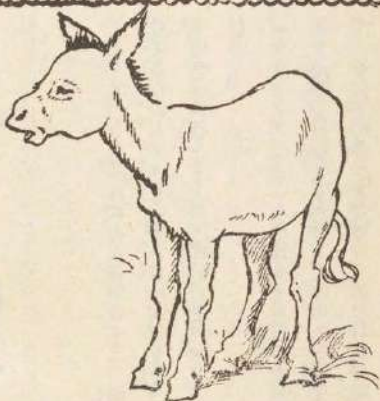
楠山正雄

(一) 株の兎

百姓がある日畑を耕してゐると、野兎が一匹向ふから畑の中を跳けて来て、路傍に偶然突き出てゐた樹の株に頭をうちつけて目をまばして死にました。百姓はさつそくその兎を拾つて肉をさんく、家内中で食べた上に、毛皮は町へ持つて行つて、いくらかのお金で売りました。

もと／＼貧乏な上になまけもの、百姓でしたから、思ひもよまない拾ひものをしたのではせ上がつてしまひ、それから毎日々々畑の爲事はせずに、あけてもくれても株の傍に立つて、兎のかゝるのを待つてゐました。多分株に魔法でもあつて兎がこれにひつかゝるのだと思ひ込んだのでせう。

とにかく兎はそれつきり来なくなつて知はだん／＼／＼れて行きました。さうして百姓はいよいよ貧乏になりました。ですからいつも一つことに張り固まつて融通の利かない人間のことを、株を守るといふのです。



(二) 驢馬と虎

支那の南の方の山の中に入ると、驢馬といふものがありません。或人が北の國から驢馬を一匹買つて舟にのせて谷川を上つて、はる／＼山の中へつれて行きました。

この驢馬が或日山の麓で何心なく草をたべてゐますと、林の奥から虎が出て来て、ふと見なれない、げけものゝやうな眼があるものですから、びつくりして林の中に逃げ込んで、驢馬を見ておぼろげにうかがひました。すると驢馬がひょんと妙な

聲を出して啼いたので、虎はいよいよびつくりして、今にも咬みついてくるかと思つてふるへておぼろげにうかがひました。けれどもいつまでたつても、こちらにかゝつてくる驢馬もなく、たゞの／＼草を食べてゐるだけでしたから、虎もだん／＼／＼かにするやうになつて、こちらも負けずに驢馬のまねをして啼りながら、かまはず向つて行きました。すると驢馬は腹を立つて、負けない氣になつて強ん上げて、虎を駈らうとしました。虎はこのとき思はず笑ひ出して、

「何だ、こんなおもしろいやつなのか」といひ／＼と、かゝつて、驢馬を咬みたふしてしまひました。





のつべら坊主



大木雄三

よくすつきり晴れたある日の晝すぎ、原つばの石に腰かけてゐたぶ、しやう者の彌太吉は、何を考へたものか、龜の子のやうに首をすくめて赤い舌をペロリと出しました。そして

「ウツフフフ。」とこんな狡さうな笑ひかたをするのであります。彌太吉が笑ふと、ひどく間のある眉毛がハの字になつて、その下の鼻がまた妙なくあひに空を眺めしるる。

だらう、だとか、相撲取りよりも肥つたらいい、それなら隣の酒屋の小僧と相撲とつても、いつかのやうに負けやしないぞ。だがまてよ、さうなると家へ這入るとき軒へ頭がぶつかつて困るだらう、とこんなつまらないことばかりなのです。ところが彌太吉は一生懸命です。大人のやうに腕組みを試みたり、むやみに首をひねつてみたりして、あれかこれかと考へ込むました。

ですけれど、いつまで考へたところで、お菓子屋の菓子屋は自分のものになりそうもないし、きふに身體がふくれだしそうにもありません。そこで彌太吉は

「あゝ、あゝ、つまらないなあ。」と言ひながら、大きな大きな欠伸をひとつやりました。それからうんと両手を伸ばしたのを、また一緒に元へかへしながら、ドント胸を叩きました。そして、もういんど「あゝ、あゝ。」と言つて、まだ「つまらないなあ」まで言はないうち、ひよいと空を見る

から、何だかへんな泣いてるやうな笑つてるやうな、少々薄笑加ちやないかと思はれる顔になるんです。でも本人の彌太吉はそんなことに気がついてをりませんから、「ウツフフ」と頻りに笑つてをります。何かよほど笑可しいことか、ばか／＼しいことか、さもなければいいことを考へつたのか知れません。もつとも彌太吉の考へることについては、お菓子屋のお菓子がみんな自分のになつたら嬉しい

かこちらを睨みつけてるやうに彌太吉は思つたのです。けれどもなかなか負けず嫌ひな彌太吉ですから、それくらゐでは逃げ出しません。負けないうで睨み返ししながら

「何だい、大入道、そんな顔したつて僕なんかちつとも怖くないぞ、だいいち僕の側え来られないだらう、口惜しかつたら下りて来い。」と空威張りになりつきました。それでも大入道は黙つてゐますから、ますますつけあがりやの彌太吉は

「どうだ、下りて来られないのだな。大入道の大弱蟲やーい。」と囃したてました。すると、どうしたことせう、いままでありありと見えた大入道はふつと消えてしまつたのです。彌太吉も何となく薄氣味悪くなりましたが、そこが負けず嫌ひの意地つ張りですから、お腹の中ではびくびくも

のゝくせに、口だけはやつぱり強きうに「大弱蟲はたうとう逃げだしたな。」と言ひました。するとその聲について

「逃げ出しはしないよ。此處にちやんと居るぢやないか。」といふ者があります。彌太吉が振り向いて見ると、恰度自



分と同じ位の背丈の、人間のやうなやつが一人立つてゐます。

「おい、君は何だい」と彌太吉は言ひました。

「僕はさつきの大入道さ。」と、すまして言ふのです。

「へーえ、妙な奴もあればあるものだ。」と彌太吉が感心するほどそれは妙なやつでした。身體中が眞黒けて、耳も鼻も口もついてゐるのです。そのくせ手と足はあたり前についてゐて、裸なのか、それとも着物を着てゐるのかどらかわかりません。

「君は随分おかしな格好だな。」

「あゝ、さうさ。君によく似てるよ。」とそれが言ふのです。

彌太吉はそんなことを言はれては口惜しくなりません。

「大入道、いや大入道ぢやない小入道、小入道ののつべら坊主。そんな妙な身體をしてよく恥かしくないね。氣まりがわるかつたら遠慮なく引つ込むでもいいよ。」

「僕はちつとも恥かしくないね、君とゐると何だか兄弟のやうに見えるだらうね。」

彌太吉は早くのつべら坊主をどこかへやつてしまひたいのですが、なかなか行きそうもないのですつかり閉口してしまひました。そればかりか、こんな變なやつと兄弟なにかにされては大へんですから

「いやだよ、いやだよ。僕はちやんと、耳も目も鼻も口もついてる人間だよ、君のやうなのつべら坊主と兄弟になんかなれるかい。まごまごすると擲りつけるぜ。」とまた、おどかしました。のつべら坊主はちつとも驚きません。

「あつはつは。彌太吉君のやうな足の頓い者には、てんで

僕を捉へることが出来やしないよ、嘘だと思ふなら捉へてみたまへ。そら駈け出すよ。」

かうからかはれて彌太吉は眞赤に、金時のやうになつて怒つて、

「よし捉へてやるぞ。」とすぐさま、のつべら坊主を追ひかけました。彌太吉は跣足はなかなか疾いのです。學校の成績こそ悪いけれども、跣足では級中一番の選手ですから、何ののつべら坊主に負けるものか、と犬のやうに素早く追ひかけて行くのですが、どうしてどうして、のつべら坊主はまるで風の吹くやうに早いのです。流石の彌太吉がとても追ひつけないで、原つのは眞中頃に來たときは、ヘトヘトになつて、べつたり尻餅をついてしまひました。ハアハア息切れがして、目がぐるぐる廻るやうな氣さへしました。

「どうしたね、彌太吉君。すつかりまるつたね、そんなに弱くちやだめだよ、お疲れでしたら肩を叩いて上げませうか。」のつべら坊主はにこにこ笑つてゐます。すこしも疲れた容子はありません。彌太吉の側へ來て

「どれ、僕もおつきあひに休まう。」

と腰を下しました。

「時に彌太吉君、君はまださつきのお菓子を持てゐたら、すこし僕に分けて呉れないか。」と、のつべら坊主は手を出しました。

「お菓子、そんなもの持つてないよ、さつきだつて僕知ら



「ないよ。」彌太吉は目をくりくりさせました。のつべら坊主は笑つて

「駄目く、隠しても駄目。僕は、君が茶葉司からそつと盗むのを見てたのだから。」

「そんなことないよ。そしてお菓子なんか、もうありはしないよ。」

彌太吉は不思議でたまりません。さつき家を出る時お母さんの目を盗んでそつと持出したあの干菓子、うまかつたなあ、と思ふにつけても、誰も見つてゐた筈はない。こんなのつべら坊主なんかいまのさつき始めて會つたのだから……

「あ、さうだ。さつき考へながら喰べてゐたとき、空から見てゐて、それがお菓子が欲しくなつて下りて来たのだ。このつべら坊主は口もないのに慾張りだ、と彌太吉に思ひました。」

「のつべら坊主、さつき空から見てゐて欲しくなつたのだな、それで貰ひに来たのだらう。」

「そうぢやない。僕はちやんと見たのだ。そのほかにも君が悪いことし……のを、何度も何度も見て知つてゐるよ、言つ

てもいいかね。」

「いいとも、さあ言ふがいい。」

「怒つちやいけないよ。」のつべら坊主は、また氣味のわるい聲で笑ひながら話をつづけた。これは一昨日のことだが、君は學校歸りに犬を苛めてゐたね、あんな小さい犬を川の中へ放り込むなんて、あまり亂暴ぢやないか。犬は苦しかつてくんくん鳴きながら水を飲んでゐたよ。運よく人が通りかかつて救けてやつたからいいが、あの儘でゐるとぶく／＼溺れて死んでしまふところだつた。これからあんな悪戯はやめた方がいいね。」

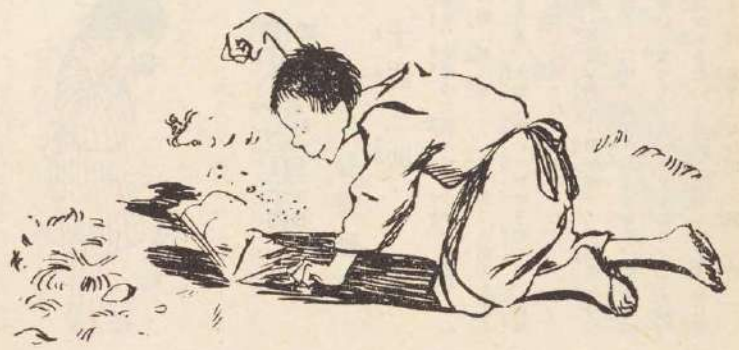
「おや、おや。誰も知らないと思つてゐたことまで知つてゐるな、今考へると可哀想なことをしたものだ、と彌太吉はさう考へましたが、のつべら坊主などに言はれては黙つてゐられませんから

「嘘を言うない」といきなり飛びかかりました。すると、のつべら坊主はひらりと身をかはして

「此處までおいで、甘酒進上！」と好きな手つきで踊りながら逃げ出しました。

「よし、こんどこそ逃がさないぞ。」

彌太吉はもう夢中になつてしまひました。死物狂ひで追ひかけると、のつべら坊主はどしどし通けます。その早いこと、疾いこと、彌太吉にはこんどもまた追ひつけません。そこで考へるには、これはどうしても捉へることができな



「よし、こんどこそ逃がさないぞ。」

いから、こんどは足を捉へてやらうと、足をねらつて「やつ」と飛びつきました。これにはあまりふいのことですから、のつべら坊主もたまりません。どたん、と前へ倒れてしまつたのです。彌太吉はすぐさまその上へ馬乗りになつて大得意です。

「どうだ、どうだ、のつべら坊主。彌太吉君は偉いだらう、さあ恐れ入りましたと言つてしまへ。」さう言つて、拳骨をかためると、のつべら坊主の頭へぐわんと叩きつけました。その頭の固いこと固いこと、石か鐵でも擲つたやうに手が痺れて「お痛い」と思はず言ひました。

「あはつはは、彌太吉君痛いだらう、痛かつたらばもう悪いことはおやめ。」とのつべら坊主は平氣です。彌太吉はなほさら腹を立てて、

「何を、この坊主。」と三つ四つ續げさまに拳骨をくらはせてをりましたが、ふつと氣がつくと、のつべら坊主はをりません。同じやうな形をした自分の影をゴッゴツやつてをるのでした。だから痛いのも道理、地面がたく乾いてゐるそこを、彌太吉は擲りつけてゐたのですもの……。

のつべら坊主の話はこれでおしまひです。



諸國傳説童話

藤澤衛彦

土佐三助

昔々、土佐の三助といふ少年が、後父さんと一輪に船に乗って、沖へ釣りに出てゐましたところ、大變に強い風が吹き起つて、何處ともなしに流されて行きました。



望みだといふので、狸の團三郎に同行を頼みました。團三郎は、直と承知はしましたが、狸の團三郎は、狐がならぬから、餘程巧みな物に化けて行かないと、忽ち危い目にあふ、ついでは何かかう變つた物に化けて行かぬさるがよいと申しました。狐は、「さうかでは何がよからう」と相談をかけた。すると、狸の團三郎は、「自分は、ちやうど旅人に化けて行くつもりだから、お前さんは雪駄に化けて行かれたらどうか」と申しました。「なるほど、それはおもしろからう」といふ

まひました。

やがて薪を背負つて山から歸つて來ました三助は、ひどく驚きまして、船を歸して下さいと、薪を限り呼びました。けれど、後父さんは、見返りもせずに漕いで行つてしまひました。

三助は、あまりの哀しさに、高い處に登つて船の見える限り眺めてをりましたが、段々に其姿が消えて行つてしまひますと、急に悲しくなつて、其處に倒れて絶え入るばかりに嘆き悲しんでゐました。

日も入相の頃、三助は思ひ返して起きあがり、東の方を眺めながら、

「故郷が戀しい、なつかしい」と、泣きながら、ふと、ある池の汀に立つて、身を投げて死なうと袂をなげますと、不思議にも、着てゐた着物の小袖から、何やらゴロ／＼と零れ出たものがあります。

驚いて取上げて見ますと、正しくそれは故郷の米の種でありました。自分で身に付けた覚えはない、それでは生母さんが、かほどにま

でお思ひになつて、もし何處かで捨てられたならば、これを作つて暮せよといふ、ありがたい、ありがたしい御志でありませう。親はかほどに子を思はれるのに、その思ひなよそにして、今自分が死んでしまつたならば、親の賜はつた形見の此親も、誰も植ゑ残す者がなく、生母さんのお志もむだにならうと、思ひ返して命を長らへ、それより、池の水淺に囀り附け、初を蒔いて、心から農事にはげました。やがて秋の來ました時、そこには二種の稻が出来ました少年は、早いのを土佐、晚いのを三助と呼んで、それから一層農作に精を出しました。今でも佐渡國に、その名で呼ぶ早稻と晚稻のあるのは、これが始めだといふことでございます。(土佐の話)

化修行

昔々、佐渡國に、團三郎といふ大變上手に化ける狸がなりました。或時、諸國化修行に出かけましたが、歸途に、越後の狐に出会ひました。狐は、一族を佐渡にも繁殖させたので、狐は雪駄に化けて團三郎に腹がれて行きました。ところが、船が、佐渡と越後のちやうど半分程の處へ來ました頃を見はからつて、團三郎は、突然、その雪駄を脱いで、ひよいと海の中へ投げ込んでしまひました。それから佐渡には、どんな狐もつけつて來ようとはしなくなつたのだといふことでございませう。(佐渡の話)



絲繰り池

土佐三助の後父さんが、三助を佐渡ヶ島に

残して、どん／＼船を漕いで來ますと、丁度波の上に、狸の團三郎が捨てた綺麗な雪駄が浮いてゐますので、こればもつたいないと、拾ひ上げて、陸へ着いてから履いて見ますと、大層履き心地がよいので、そのまゝ段々やつて來ますと、物凄い池の畔に出ました。故郷の土佐國とは景色が變つてをりますので、なにかしく思ひ出しました。足の裏が痒くなり、またしたので、雪駄を脱ぎました。ところが、突然雪駄が歩き出しましたから、びつくりして道ひかけようとする拍子にドボンと其處の物淺い池の中に落ちてしまひました。氣が付いて見ますと、池の中に半取つた女の人が、絲を繰つてをりました。驚いて覗き込みますと、「お前さんほどつかれたかね」と女の人がさつとして尋ねました。「土佐からです」と三助の後父さんが申しましたら、女の方は、血相を變へて、「何ッ、へ朝から來てゐた。それでは見たなッ」と言つて、三助の後父さんを小衝きました。



熊になつた王女

齋藤佐次郎

—
むかしある處に、たつた一人のお姫さまをもつた王様がありました。王様は王女の事が、これは自慢で、

ですから私のいふ通りになさい。お父様の處へいらしつて、木でこしらへた手押車と熊の毛皮を下さるやう、お願ひなさるのです。それをお貰ひになつたら、また私の處へいらつしやい。私の魔法の杖でさはつてあげますから。木の手押車はひとりでに動出して、あなたのお望みの處へなら何處へでも全速力でつれて行つてくれます。それから熊の毛皮は、誰もあなたと氣がつかないやうに、あなたをくるんでくれます。』

そこで王女は、妖婆のいつた通りにしました。王様は、王女の妙なたのみをお聞きになつて大變に驚かれて、木の車と熊の毛皮を何につかふつもりか、とおきになりました。それで王女は、かういひました。

『とう様は、私をお城の外へ出して下さいません—ですもの、これ位のことお願ひしたつてきて下さい。』

可愛くてたまらないものですから、もしもお城の外へ出ると、何か間違ひでも起りはしないかと思つて、案じてばかりいらつしやいました。それで可愛いあまり、王女をお部屋の中に閉ぢこめて、一生その中で暮すやうに、しておしまひになりました。

でも王女は、さうされた事が辛くてならないので、ある日のこと、乳母に言つて、どうにかしてくるやうにとお頼みになりました。

さて、この乳母は王様はご存知なかつたのですが、實は妖婆だつたのです。妖婆は王女から頼まれたものゝどうにかして王女をなだめて、辛抱させたいと思つたのですが、でもどうしても王女がきゝ入れないものですから、たうとうかういひました。

『お父様はあなたを可愛くてならないのです。あなたがお願いすることなら、何でもきいて下さい。ただ一つお許しがないのは、お城の外へ、出ることできません。』

王様はお許しになりました。王女はすぐさま、木の車と熊の毛皮を持つて、乳母のところへ歸りました。乳母の妖婆が魔法の杖でさはると、忽ち木の車はどつちの方向へも動きはじめました。それから王女は熊の毛皮をかぶりましたが、誰が見たつてそれが熊でないぞと、思はれない位様子が變つてしまひました。さういふ不思議な姿で、王女は木の車に乗りましたが、間もなくお城の外へ出て大きな森をつき抜けて、どん／＼走つて行きました。それから王女は、妖婆が教へてくれた通りの合圖をして木の車を止めました。さうして花の咲き亂れてゐる藪の深い繁みの中へ、自分の姿も、車も、かくしてしまひました。

さて、その時こんな事が起りました。その國の王子が犬をつれて、森の中を狩してゐたのです。王子



はふいに藪の中にかくれてゐる熊をみつけたから、犬をたくさん呼んでけしかけました。王女の熊は、おそろしくてどんなに震へてゐた事でせう。たうとう堪へられなくなつて、

「あなたの犬を呼んで下さい。私は殺されます。私にはあなたに何も悪い事をしないちやありませんか。」と、聲をたてました。

王子は熊が口をきいたので、ヤクリとして棒立になつてしまひましたが、暫くしてからそれは穏やかな聲でいひました。

「私と一しよにお出で。お前を私の家へつれて行つてやるから。」

「喜んで参りますわ。」と、熊はいつて木の車に乗りましたが、車はすぐ様王子の御殿の方へ動きはじめました。

王子が熊をつれて歸つて来た時、王子のお母様はどんなにびつくりなさつたでせう。しかも、その熊がこれまでに使つたどの召使よりも、せつせと家の仕事をしました。

二

さて、となり國の王様の御殿で大そうな宴會が開かれる事になりました。それで王子は、ある日のこと兵事をしながら、

「今夜は大舞踏會があるので、私も行かうと思ふ。」とお母様にいひました。すると、いつもの様にテールの下にうづくまつてゐた熊が、ふいに頭をあげて、

「私もつれて行つて下さい。私をもどりたいんです。」と、いひ出しました。

けれども王子の方では、そんな事に返事一つしないで、いきなり熊を力一ぱい蹴とばして、お部屋の外へ追出してしまひました。

夕方になると、王子は舞踏會へ出かけて行きました。熊は王子の行つたのを見て、王子のお母様のところへとんで行き、「私もいかせて下さい。だあれにも知れないやうに、身體をかくして行きますから。」と、お願ひしました。やさしい心のお母様なので、いけなしいふ事も出来ずに、たうとう許しておしまひになりました。



そこで王女は、木の車のところへ走つて行つて熊の毛皮をぬいで、妖婆から貰つた魔法の杖でそれにさりました。熊の毛皮はたちまち月の光で織つたまはゆい舞踏服に變つてしまふし、木の車は二頭の勇しい駒にひかれた馬車に變つてしまひました。

王女が、月の光の不思議な衣装を着て舞踏室に入つて行つた時、そこにゐた人たちの驚はどんなでし
たらう。ほかのお客とは比べもつかないその美しさ
に、あの王女はたい誰かしらと、みんなふしんに
思ひました。でも、王女が何處から来たか、いへる
ものは一人もなかつたのです。

王子は王女を一目見た時から、自分でもわから
ない位好きになつてしまつて、その晩は晩中、
その美しい見知らぬ王女とばかりをどりたいと思ひ
ました。

をどりが終ると、王女は自分の馬車を全速力で走
らせました。王女は、自分が誰であるか、だあれに
も知られない内に家へ戻つて、舞踏服を熊の毛皮に
變へ、馬車を木の車に變へなければならぬと思つ
たのです。

王子は馬に鞭をあて、王女を見失ふまいと追ひか

最初のをどりを弾きはじめて時、美しい王女が、昨
夜よりも、もつと光りかゞやいた姿で入つて來まし
た。こんどの衣装はお日様の光で織つたのでした。
一と晩中王子は、その王女とをどりましたが、王女
は前の晩のやうに一言も口をきませんでした。
をどりが終ると、王子は今日こそ王女が何處から
來たのか、せひとも見さだめたいと思つてまた馬車
の後を追ひかけましたが、ふいに龍巻のやうなもの
が空から落ちて、瀧のやうな大雨になつて、跡を見失
つてしまひました。

そのまたあくる晩も王子は、三度目のをどりに出
て行きました。王女も行きましたが、今度は熊の毛
皮を、星の光で織つてそれに眞珠を一ばいちりばめ
た衣装に變へて行きました。王女は、誰が見たつて
目がくらむ程きれいなので、これまでにあんな美し
いひとは見たことが無いとお互ひに話しあつてゐま

けました。けれども、
ふいに霧が出て王女の
姿をかくしてしまひま
した。

そのあくる晩も舞踏
會があつたので、王子
は「もう一度あの愛ら
しい娘さんにあへるだ
らう、それから一しよ
に躍つたり、自分も話
しかけ、向からも話を
してもらふ事が出来よ
う。」と思つて、いそい
そと出かけて行しまし
た。

思つた通り、音楽が

した。王子は王女と一
しよにをどりましたが
その晩も口をきいても
らふ事は出来ませんで
した。でも、巧いこと
に王女の指に指輪をは
めこむ事が出来たので
す。

をどりが終ると王子
は王女の馬車を見のが
なさいほどの早さで追
ひかけましたが、その
内にふいに自分と馬車
との間に大風が起つて
今度も追ひつく事が出
來ませんでした。



家へ歸り着いた時、王子はお母様にいひました。「私は氣狂ひになりさうです。私は舞踏會で毎晩あふあの王女が戀しくてならないのですが、あの人が誰なのか、知る事が出来ないのです。私は今夜あの人と一しよに躍つた時、指輪をあげただけれど、名前だつて解らないし、どこにあの人がゐるのか、それも解りはしないのです。」

熊はいつもの通りテーブルの下にゐましたが、王子のいふのを聞いてクス／＼笑ひ出しました。

それから王子はまたいひました。

「お母様、私は死んだ方がいゝ位、くさ／＼してゐるのです。さア、スープをこしらへて下さい。だけれど、あの熊のやつにさはらせちやいやです。あいつは、私が舞踏會であふ王女のことをいふたんびに、何か口の中でいつては、クス／＼笑ふのです。私を馬鹿にしてゐるのです。私はあいつを見るのも

いやだ！」

スープの用意が出来ると、熊は王子のところへ持つて行きました。さうして、それを王子に渡す前に、ひよいと皿の中へ、前の晩王子から貰つた指輪を落してしまつたのです。

でも王子は、それとは知らずに、そろ／＼と、つまらなさうにスープを飲みはじめましたが、さてどうしたらあの美しい王女に、もう一度あへる事かとそればかり思つて、それは悲しい思ひをしてゐました。

ふいに王子は、皿の底の指輪に氣がついたのです。すぐに王子はその譯を知つて、驚いて口もきけませんでした。その時王子は、あはれみを乞ふやうな目で、自分を見つめながら立つてゐる熊を見たのです。

「その毛皮をおとり、何か秘密が下にかくれてゐる物を着た、それは美しい娘が王子の前に立ちました。王子はその娘が自分の戀しがつてゐたその王女である事を知つて、どんなに喜んだ事とせう。いま、王女は前よりも何層倍も美しく王子の目に向つてました。王子は、お母様の處へ美しい娘をつれて行きました。

そこで王女は、かなしい身の上を皆んなに話しました。お父様に御殿の中に閉ちこめられてゐた事や、乳母の妖婆がお城の外へ出してくれた事をこま／＼物語つたのです。

王子のお母様は王女をそれは可愛くお思ひになつて、息子がそんなに氣だてのいゝ美しいお嫁をさがした事をお喜びになりました。

そこで王子と王女は、めでたく結婚式をあげていく年もの間仕合せに暮しましたが、その後は國內もたいそうよく治つてゐたといふ事です。(をばり)



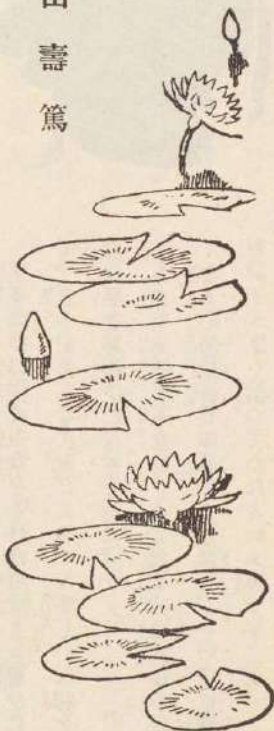
のだから。」

と王子はいひました。

熊の毛皮はする／＼と落ちて、星の光で織つた着

魔の沼

横山 壽篤



マリイのお母さんは、長い間病気で臥つてゐました。醫者にも見せ、占者にも見て貰ひました。けれどもマリイの家は貧乏だったので、療り切るまで薬を飲むことが出来ませんでした。

この頃マリイは頻りと魔の沼のことを思ひました。魔の沼といふのは、其處から十哩ばかり離れた山の奥にあるのです。そして其沼には春夏秋冬、始終美しい睡蓮の花が、一ぱい咲いてゐて、どんなに重い病氣に罹つてゐる人でも、此睡蓮の花の香を臭げば、すぐに全快するといひ傳へてゐます。

「お母さん、魔の沼つて、ほんとに怖い處？」とマリイはお母さんの額に手を當てながら聞きました。「なにね、マリイ、心さへ美しければ、魔の沼だつて何處だつて、ちつとも怖かあないよ。」とお母さんは、此時ばかりは明瞭といひました。

「でも幾ら心の綺麗な人でも、魔の沼に行つたら、十字を切らなきやいけないんですつてね。」

「それから沼の中へ小石を三つ投げて通らな、ひどい禍ひに逢ふとさ。」

「まあ、さうー」

マリイは寒けを覚える程恐しさを感じました。が、すぐ其後から、恐ろしさを掻き消すだけの希望が起つて來ました。そこで聲までも晴れやかに、

「お母さん、お母さんの病氣はきつと癒るわ、ね、きつと癒るわ。」といひました。その翌日、父親のデエルメンは、マリイの机の上に、もう誰か聞いて見たやうな手紙らしい紙が一枚乗つてゐるのを見付けました。それを讀んだデエルメンは、びつくりした聲で、

「マリイは魔の沼へ行つたのだ。」と叫びました。

「まあ、それでは、私の病氣を療さうと思つて：：。」と母親はもうおろ／＼聲でいひました。



「睡蓮の花を探つて來ると書いてある。それぢや私は、直ぐこれから、馬を飛ばして行つて來るせ。」と父親は、手紙をぎゅつと握つて立ちあがりました。「神様、どうぞマリイが無事でゐますやうに、あの子は其れは正直な親切な親思ひの娘で御座いま

す。どうぞ、どうぞ御護り下さいませ。」と母親は床の上に打伏して一心にお祈りをしました。

ヂエルメンは若輩毛の馬に鞭をあて、マリイの身の上を氣づかひながら、魔の沼をさして急ぎました。五六丁も走つた時、輩毛は物に驚いたやうにびたつと止りました。見ると足許の叢に弟のビエールが轉つてゐました。そして大聲に、

「お父さん、僕も連れて行つておくれ。」と、いひました。

「いけない、子供が行く處ぢやない。」

「嫌だ、僕一緒に行かうと思つて、先に來て待つてゐたのだもの、僕も乗るんだ。」

「駄目だ、二人乗つけることは出来ないつて、輩毛が然う云つてゐたよ、先刻。」

ビエールは輩毛の前肢に兩手を絡みました。馬はおとなしかつたので、一歩も出ることが出来ません。

馬を樫の木に繋ぎました。そして枯木を集めて火を燃して、ビエールの身體を温めました。その中に、霧が大分薄くなつて來たので又ビエールを抱いて馬に乗つて、

「マリイ、マリイ。」と呼びながら進みました。

ヂエルメンは木の間から輝く星を見ることが出来ました。月はダイヤモンドのやうな光を、魔の沼に投げてゐました。マリイの名を呼びながら凡そ二時間

「それではあの姉さんの書いたものを先に見たのはビエールお前か、何故それなら、直ぐに教へないのだ。」

「僕も行くのだよ、よう／＼。」ビエールは馬の肢を離しませんでした。

「仕様がないなあ。」父親のヂエルメンは、たうとうビエールを馬の上に引き上げました。

森についた時には、もう日がとつぶりくれました。

「厄介だなあ、家ではビエールのことまで心配してゐるに違ひない。おや／＼、もう眠つてゐるのだな困つて了ふなあ。」とヂエルメンはつぶやきました。

小さいビエールは、馬の上で疲れて居眠りをしてゐました。

沿の近くまで來ると、生憎深い霧が下りて來ました。もう進むことも歸ることも出来ません。ヂエルメンは仕方無しに馬からビエールを抱いて下りて、

も行きますと、向ふに火が見えました。ヂエルメンは急いで其火のある處へ行きました。

「何だ、先刻私が燃した火ぢやあないか。」

ヂエルメンは呆れました。長い間かゝつて元の處へもどつてゐるのです。

「これは屹度騙されてゐるのだ。」

とつぶやきながら又進みました。すると瘦せた魔の腕のやうな枝が、行手をふさいでゐました。輩毛が立ちどまつたので、あたりを見てみると、白樺の木の下に一人の少女がよりすがつて眠つてゐました。

「マリイ！」

ヂエルメンはびつくりして叫びました。そして近寄つて見ると、矢張りマリイでした。

「マリイや、マリイ、マリイ。」父親



はマリイをしつかり抱きしめましたマリイは両手に
睡蓮の花を一ぱい抱へたまゝ、つめたくなつてゐる
のでした。ビエールは、やつと此時目を醒ましたま
した。

「姉さんどうしたの、死んでるの、此處はお父さん
何處、魔の沼？」

と、あわたしくききました。

「さうだ、魔の沼だ。」

「お父さん、十字をきつたかい、そして小石を三つ
沼の中に投げたの？」

「そんな事するもんか。」と父親は叱る様に云ひま
した。

「それは不可ないや、騙かされるよ。」といひながら
ビエールは胸のあたりで十字を切りました。そして
小石を三つ拾つて、トボン、トボン、トボンと沼の
中へ投げ込みました。三つ目の小石が沼の水の面で

トボンといつたかと思ふと、マリイがわつと泣き出
しました。

「おゝ、マリイ、私だ、私だ、ビエールも来てゐる。」

「姉さん、どうしたの？ 十字を切るのを忘れたの
ぢやない？ 僕今小石を三つ投げたよ。」

「まあ、夢ぢやないか知ら、お父さん、ビエール。
とマリイは初めて口をききました。

「夢ぢやない、夢ぢやない、さあ何でもいゝから早
くお家へ歸らう、葦毛も一緒に迎へに来てゐるよ。」
と父親のヂエルメンは、マリイとビエールを先に馬
に乗せて、自分も乗りました。

「さあ氣の毒だが、成るだけ急いで歸つておくれ。」
とヂエルメンは葦毛に云ひました。

三人を乗せた葦毛はいそゝと駆けました。マリ
イの抱へてゐる睡蓮の花は月の光を受けて香りまし
た。(をばり)

人 橋

野口雨情

隣の家は

昨日も 留守だ

厩の背戸に

蚯蚓が 鳴いつた

人橋 かけろ

長橋 かけろ

姉上様は

馬に乗つて 通つた



「人橋かけろ」は「多勢集つてこ
い」といふ茨城地方の方言です



2

「あゝ吉兵衛か、何かめづらしい物を探して来たか。」
 殿様は、さつそくおきになりました。
 「ハイ、「初音の鼓」と申します實に世にめづらしいものを手に入れて参りました。どうぞ是非御覽下さいませよう。」
 さういつて吉兵衛が、桐の三重の箱から金襴にくるんだ古い鼓を出しました。殿様は手にとつて御覽になつてゐましたが、
 「して、折紙はあるかな。」とお尋ねになりました。「折紙」といふのは、その品がたしかなもので、決して贋物でないといふ證明書のやうなものです。さて、商賣にかけては抜目のない吉兵衛のことですから、
 「折紙はありませんでも全くだしかな品でございます。」といつて、でたらめな鼓の説明をはじめました。
 「そも〜「初音の鼓」のいはれを申し上げますと、桓武天皇の御代、宮中に雨乞ひがありました時、大和の國の山奥から千年の年をへた雌狐雄狐二疋の狐を狩出して、その生皮をはいで造つたものに御座います。日向つて鼓を打ちましたところ、忽ち雨が降つて民百姓が喜びの聲を擧げましたので、それで「初音の鼓」と申すので御座います。」
 殿様は感心して聞いてゐましたが、「それは實に不思議な鼓だししかし、もう外に何か不思議はないか。」とききました。

橋 雪

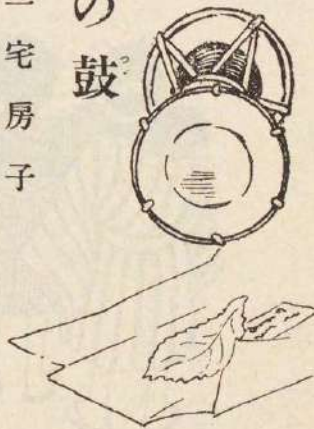
畫一重橋船



1

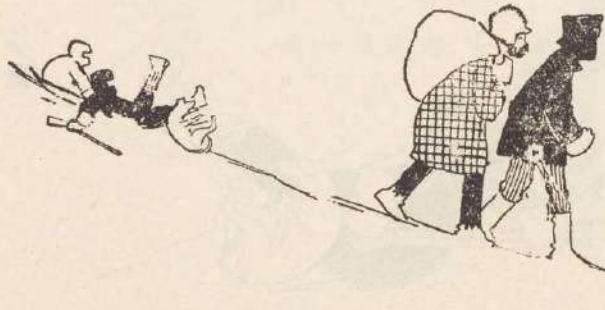
初音の鼓

三宅房子



五八

一
 むかし都にひとりの殿様がゐました。もうその頃は世の中が泰平で、戦争がなかつたものですから、馬鹿殿様が多くゐました。
 この殿様もその一人で、何にもする事がないので、古い道具を澤山に買込んで、それを列べて嬉しがつてゐました。それも眞物の立派な道具ならいのですが、何れもお出入りの商人がごまくわして、賣りつけに贋物ばかりです。
 ある日のこと、殿様がお道具の蟲干をしてゐますと、道具屋の吉兵衛が来て、「お殿様、大そう御無沙汰いたして相濟ません。實は商賣のため、大和めぐりをいたして居りました。」と、いひました。



「ございますとも。それをお打ちになると、傍にゐるものに狐がのり移ります。」

「それは奇妙だ。さつそく予がためして見よう。」

殿様は鼓をお抱へになつて、「ボン」と鳴しました。すると、忽ち吉兵衛が其處へ倒れて、「コン」と、なきました。殿様は驚いて「吉兵衛どうかしたか」ときくまると吉兵衛は夢からさめた様に起き上つて

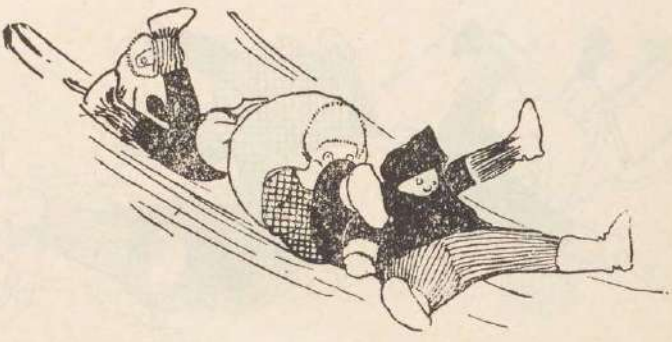
「ハイ、一向夢中で御座いました。」といつて、目をこすりました。そこで殿様はすつかり喜んでしまひまして、さつそくそれを百圓で買ひとる約束をしました。

二

吉兵衛は大和の古道具店であつて来た古鼓で殿様をだまして、巧く百圓に賣りつけたのですから、ほく／＼してお屋敷から歸りましたが、それには後で嘘のあらはれないよう、お屋敷の三太夫に相談をかけて置かなければならないと思つて、三太夫の家へ行きました。

「吉兵衛さんか、久しく見えなかつたが、大和廻りをされたさうだから、何か殿様へめづらしい品でも納めて来たかね。」と三太夫がいひました。

「ハイ、それで御相談に參つたのですが、……」といつて、吉兵衛は、すつかりの事を打聞けた後で、自分だけが狐のなき聲をしたのでは嘘が



あらはれてしまふから、あなたも是非殿様のお目どほりで鳴いてもらひたい。」と頼みました。

「つまらぬ事をいつては困る。侍が狐のまねなど出来るものか。」

「そこを是非一つお願ひいたしたいのです。その代り一と聲一圓のお禮をいたします。殿様がボンと叩いてあなたがコンといへば一圓、コンコンといへば二圓、コン／＼と三聲ならば三圓差上げます。」

三太夫はもと／＼慾張りな男でしたから、金のことをいはれたので、すつかりその氣になつて、殿様のお目どほりへ行きました。

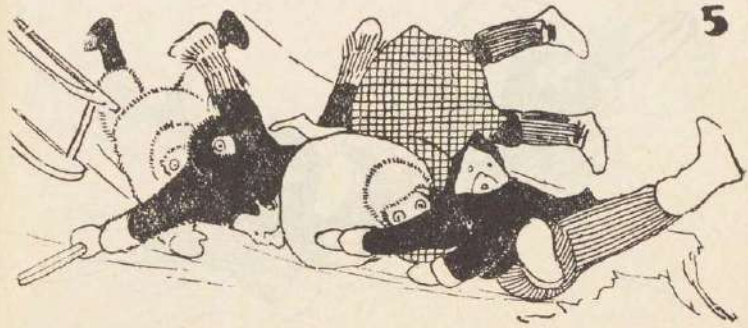
『たゞ今出入りの商人吉兵衛より承りましたが、お殿様には「初音の鼓」をお買上げになりましたさうで喜び申上げます。』と、三太夫がいふと、殿様は嬉しがつてゐた處ですから、すぐさま鼓を取上げてボンボンとなきました。三太夫は忽ちそこへ倒れて、「コン、……コン／＼……」

となきました。殿様は愈々ニコ／＼して「三太夫どうした。」ときくと

『一向夢中でございました。狐がのり移つたものと見えます。』と答へたので、殿様はすつかり面白くなつて、ボン／＼ボン／＼ボン／＼とつゞけざまに鳴しましたから、三太夫は聲をからして、

「コン／＼コン／＼……」と、夢中でなきました。

三



5

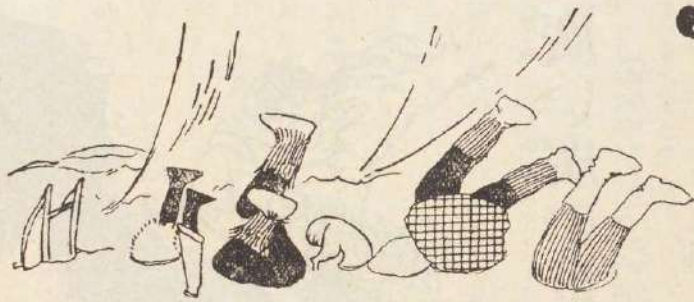
その後で殿様は大勢の家来をあつめ、みんなに狐をのり移して面白がらうと思つて、鼓をたゝきました。誰一人として狐の乗りうつたものがありせん。殿様は初めて欺された事に気がついて、大變に立腹され、どうかして吉兵衛達をいぢめてやらなければならぬと考へました。

翌日、吉兵衛が百圓のお金を受とり、やつて來ました。そこで殿様は待ち兼ねてゐたやうに、

「吉兵衛あの鼓は實に不思議な鼓だ。しかし手に少々まだわからぬ事があるから、お前手に代つて二つ三つ鳴して見てくれないか。」と、いひま



六二



6

した。吉兵衛は嘘があらはれさうになつたので、もち／＼して、

「へい、實はその……鳴物は一向にやつた事が御座いませぬので、どうぞそれはかりはおゆるし下さいませう。」とたのみましたが、殿様の方では、「巧い拙いをいつてゐるのぢやない。是非一つ鳴らせ。」と切りこせめられるので、吉兵衛は困り切つてしまひ、その場合鳴らさぬ譯にも行かないので、たうとう仕方なく鼓をとりあげて、「ボン……」とたゝきました。すると殿様が、「コーン……」といつて、そへ倒れてしまひました。それから暫くして起き上つた殿様は、

「吉兵衛その鼓は實に不思議な鼓だ。約束通りの金をやるぞ。」といつて、懐中から奉書の紙に包んだ金包を出して渡しました。吉兵衛は穴へでも入りたいやうな氣持ちで、金の包をもらふとこそ／＼と逃げるやうに歸つてしまひました。さて、屋敷を出た吉兵衛はその足で三太夫の家へ行つて百圓の金をお互ひに分けあはうとしましたが、奉書の包をとくと申からお金の代りに一枚の木の葉が出ました。それと一しよにこんな文句を書いた紙切れが出て來ました。

この木の葉は大和の山奥の千年の年をへたお狐様から貰つたものだ。何處へ持つて行つても金百圓に通用する。

吉兵衛も三太夫も開いた口が塞りませんでした。(なはり)

六三



広い広い世界へ

(英雄ジャック・ポポルンの話その二)

楠山正雄

にふはく空の上をとんで行つて、やがて或山の頂にジャックを落しました。

さてジャックはどうしてこの山を下りたものだらうと思つて、そこを見まはしますと、その峻しい巖のかげに鷲の巢があつて、その中に大きな鷲が一羽寝込んでおりました。それを見ると、ジャックは考へるひまもなくいきなり大鷲の脊中に、馬に跨るやうに跨りました。すると鷲は目をさまして、この無作法な乗り手をふり落さうとして猛り狂ひました。けれどジャックは、上手な馬乗が荒馬をこなすやうに、うまく荒鷲をのりこなしましたから、鷲もふり落すことはあきらめて、こんどは山といはず河といはず、つむじ風のやうにぐるぐるとびまはりましたが、しまひには自分が目がくらんでしまつて、ぐつたり羽を落したまゝ、地べたの上へたばつてしまひました。

ジャックは一日も早く家に歸つて、好きなイリュースカの顔を見たいと思つて、毎日船の上でのび上がつて、國の方の空ばかりながめてゐましたが、それはちやうど路のりの半分位来たかと思ふ頃、或夜はげしい嵐がおこつて、ジャックののつてゐた船を大きな巖にぶつけて、こなぐにこはしてしまひました。そして乗組員は、のこらず海に沈んでしまひました。

その中でジャック一人はふしぎなことで命を助かりました。一度は海に落ちたのですけれど、海の底から大山のやうな波がむくくと盛り上がつてそのつべんにジャックをのせたまゝ、高い空の上まで突き上げたとき、折よくそこに浮んでゐた雲にジャックは手をかけました。すると雲はジャックと一しよ

その時ふとジャックが見ると、どうでせうすく目の下に、自分の村のお寺の塔が見えるではありませんか。ジャックはどんなにびつくりもしました、嬉しくも思つたでせう。ジャックはさつそく目をまはしてゐる鷲の脊中を下りて、自分の村へ急いで行きました。

『わたしは家へ持つてかへるお土産が何にもなくなつた。持つてかへつたのは、たゞわたしの昔のまゝの變らない心だけだ。』

さう心に思ひく、なつかしいイリュースカの家を叩きました。中から出て来たのはつひに見知らない女の人でした。

『おやごめんなさい。家をまちがへました。』かういつて、ジャックはあわてゝ出て行かうとしますと、その女の方はジャックを呼びとめて、

『あなたはどなたをおたづねです。』と聞きました。

ジャックがこれ／＼の人だといふと、女の人はずと目の中に涙をうかべました。ジャックはどんないな、恐ろしいしらせを聞くのかと思つて、胸をどきどきさせました。

まつたくこれほどいやな、恐ろしいしらせは聞かうといつたつて聞けるものではありません。イリユースカは死んだのです。あの心のやさしいイリユースカは、いちのわるい魔女にいちめ殺されて死んでしまつたのです。

ジャックはしを／＼重たい足を墓地へ運んで行きました。その日一日イリユースカのお墓の前につつぶして、目のくれるまで泣いておきました。もう自分も一しよに死んでしまひたいやうに思つて、どこまでも死ぬ處まで行くつもりで、またあてもなしに旅から旅へさすらひ歩かうと決心しました。

その晩更けてから、ジャックはもう一度イリユースカのお墓におわかれをいひに行きました。すると、ふとお墓の中から一本の薔薇の木がむく／＼生え出して、きれいな薔薇の花が一輪その上に咲いておました。ジャックはその花を摘みとつていひました。

「あの人の灰の中から咲き出したかはいらしい薔薇の花、わたしと一しよに長い／＼旅をしようね。やがてその旅がおしまひになる時は、わたしが死んであの人の魂と一しよになる時だよ。」

二

それからはジャックは、いつも悲しい目をして、死ぬことばかり考へながら、國々を経めぐつて歩きました。その間にも、何百度となく死ぬほどな危い目にあひましたけれど、體に傷一つつきませんでした。度々の功名で劍はもう錆びきつてしまつて、英雄ジャックの名はどこへ行つても名高くなりました。

が、ジャックはうれしいとも思ひません。たゞ死ぬ場所ばかりさがして歩いておりました。

或日ジャックは深い森の中を歩いて行きますと、路が右左に分れるところへ出ました。するとそこで木を拾つてゐたおばあさんが、

「あなたは命を大切に思ふなら左の道をおいでなさい。右の道は恐ろしい大男の國へ行く道です。誰でもその國へ入つてごらんない。すぐと大男の踵の下に踏み殺されてしまひます。」といひました。

「ありがたう、おばあさん。せつかく親切に教へてもらつたが、わたしはやはり右の道へ行つて、その大男がどんなに悪い奴だかためして来ようよ。」



かうジャックはいつて、右の道ですん／＼行きました。やがて大男の國の境まで来るとそこには大きな瀬の早い川が流れ出ておりました。その川の向ふに一人、まるで高い塔でも見上げるやうに丈の高い大男の番兵が突立つておりました。

その時大男は目ばかりジャックを見つけて、
「向う岸の草の中に人間がむづ／＼動いてゐるやうだ。おれの踵が踏んづけたがつてちく／＼する。」
かういつて大男はたゞ一またぎに河を越して、いきなりジャックを踏んづけようとした。けれどジャックはすばやく拔身をふり上げて大男の踵につつまみましたから、大男は痛がつて、獅子のうなるやうな叫び聲を立てながら、河の上に横倒しに倒れました。ちやうどそれで橋が出来ましたから、ジャックは大男の體の上を渡つて、すん／＼お城の方へ急いで行きました。

お城へ来て見ると、すばらしい建物にさすがのジャックも目をまるくしました。何百といふ塔が空の中まで高く立つてゐて、横にはどの位大きいかまるで目が届きません。でもまったくこれより小さくつては大男の王が住まふことができないのです。



ジャックはかまはずお城の中へ入つて見ると、王様は家來たちを集めて、ちやうど食事の最中でした。一體何を食べてゐるのかと思へば、大きな花崗石の岩をちぎつては、がり／＼食べてゐました。

「ごきげんよろしう、たんとお上がんさい。」

かういつて、ジャックがだしぬけに聲をかけますと、大男どもはびつくりしてうなりました。

「この人間の蟲けらめ、よくこゝまで入つて来た。せつかく来たものだから、御馳走のお裾分けをしてやる。これを甘くないとでもいつて見ろ、指の股にはさんで、一ひしぎにひしぎつぶして、貴様の肉を薬味にふりかけてくれる。」と大男の王様がいひました。

「ふん、その御馳走をおれが食べるか食べないか、ためしに一皿こゝへ出してごらん。」

かうジャックがいふと、王様は百斤もある岩を缺

いてやつて、一口かじればジャックが齒をぼろ／＼に缺いてしまふだらうといつて笑ひました。そのすきにジャックはその中で一ばん大きい岩をつかむといきなり力まかせに王様の顔をめがけて打ちつけますと、王様はぼくりと死んで、椅子から轉げ落ちてしまひました。

「またこんど岩の御馳走に呼んで下さい。」とジャックはいひました。

王様が殺されると、家來の大男共はみんなふるへ上がつて、ジャックに降参しました。

「よし／＼お前たちの降参をゆるして家來にしてやる。だがわたしはお前たちと一しよにこゝにゐるわけには行かない。たゞこれからいつでも用のあつた時、すぐ駆けつけて来て、わたしのいひつける用をしてくれ、ばいゝのだ。」

ジャックはかういつて、大男からいつでも呼び出

せる合圖の笛をもらつて、また旅に出て行きました。

三

これからまたジャックはどの位長い旅をつゞけましたらう。ジャックは行けば行くほどだん／＼そこらがくらくらなつて、もう手さぐりで歩かなければならないやうになりました。

『もう夜なのかしら。わたしの目が見えなくなつたのかしら。』

けれどそれは夜になつたのでもないし、ジャックの目が見えなくなつたのでもありませんでした。太陽も月も星の光も透さない暗闇の國で、これは魔女の國でした。その暗い國の一ばん暗い森の中に魔女たちは大勢集つてゐて、その頭の上で、鼻がほうほうと寂しい聲で鳴いてゐました。

好きなイリユースカをいちめ殺してから魔女とい

て頼みました。

するとおぢいさんは首をふつて、

「渡して上げたいのは山々だが、これは話に聞いておいでだらうが果てしらすの海といつて、横にも縦にも果てを知らない廣い海なのだ。」といひました。

「果てしらすの海だといふのかい。それではわたし



ふ魔女はジャックの敵でした。ジャックは一人のこらすみな殺しにしてやらうと思つて、合圖の笛を吹きますと、約束通りすぐと大男たちは出て來ました。ジャックは大男を指圖してのこらす魔女を退治しまひました。イリユースカの繼母だつた魔女は一番おしまひまでかくれてゐましたが、たうとう見つかつて之も大男の踵に踏んづけられてしまひました。ジャックは大男の骨折をほめて、この忠義な家來たちにわかれると、また旅に出て行きました。

四

ずん／＼進んで行く中に、ジャックはやがて大きな海の岸に出ました。この海を渡してくれる漁師はゐないかと思つて、ジャックはそこらを見まはしました。そこに一人おぢいさんが綱をつくらつてゐるのを見つけて、ジャックは渡舟を出してくれといつ

はいよ／＼渡つて見なければならぬ。

かうジャックはいひながら、呼子の笛を吹いて大男を呼び出しました。

大男はさつそく一人現れました。ジャックはその頭につかまつて海を渡ることになりました。何でも三週間のべつに海をわたつて歩いた末、たうとう三週間に遙か遠方にかすかに陸

らしいものが見えて來ました。

「おい見ろ、たうとう陸に着いたから。」かうジャックがいふと、大男は首をふつて、

「なあにあれば陸ではありません。島ですよ。」といひました。

「何の島だらう。」

「お聞きになつたこともあるでせうが、あれは仙女の國の島でござ

います。仙女の國は世界の果てにあるのです。そして海はその國の向ふにどこまでも果てしなく遠く續いてゐるのです。」

「その島にわたしをおろしておくれ。わたしはその島をたづねて見たい。」

「よろしうございます。ですがお氣をおつけなさい、仙女の國の門には恐ろしい獸が番をしてゐて、怪我でもなさるといけませんから。」

五

仙女の國の第一の門には、三四の猛獸が番をしてゐましたが、ジャックははげしい戦をして、のこらず退治してしまひました。

第二の門には血に渴いた三四の獅子が待つてゐました。その血に渴ゑてうなるたんびにそこの樹木がふる／＼ふるへる位でした。ジャックは一日が

りで、やつと三四とも退治して、額の汗をふきもあへずさつそく第三の門にかかりました。

第三の門には、恐ろしいといつてこれほど恐ろしいものゝない毒龍が棲んでゐました。その恐ろしいすがたを見ただけで、誰だつて血のめぐりが止まつてしまふでせう。けれどもジャックには何もこはいといふものがありませんでしたから、かまはず向つて行きました。どうしてこれを退治するかといふことは、さしあたり困つたことでした。とても劍の刃がこの毒龍の體に立つものではありません。

するうちに毒龍がジャックを見つけると、大きな氣味のわるい口をあげて向つて來ました。それを見るとき、ふとジャックは思ひついて、いきなり毒龍の口の中にとび込みました。喉を通つて胸までくると、劍をぬいてすた／＼に毒龍の臟腑を切りました。そして横腹を割いて外へ出ると、もうそこは仙女の國

つくところではありませんでした。

かういふ美しい國に仙女たちはいつまでも變らない幸福な生涯を送つてゐました。ジャックが長い／＼廣い／＼世界の旅の果てにたどり着いたのはかういふ國でした。仙女たちはジャックを見つけると、やさしい言葉でジャックを美しい國の中まで案内してくれました。けれどもジャックは、夢からやつと醒めた人のやう、なはつきりしない風で、このきらきらした景色の中に、一人ぼっち寂しく考へ込んでゐました。

やがて仙女たちはジャックを美しい湖水のほとりへつれて行きました。これは生命の湖といつて、死んだものもこの中に投げ込まれると、また生き返つてくるふしぎな湖水でした。ジャックは此時までもあの時草地から摘みとつて來た薔薇の



の美しい花園でした。

いつまでも變らない春、いつまでも變らない若さ、仙女の國の美しい景色はとても人間の夢で考へ



花を内うちがくしに入れて、胸むねに抱かかきしめてゐました。
 「さて、わたしのたつた一つの大事だいじな寶たからよ、この美
 しい御幕場おほかぶらにかへるがいに、やがてわたしもあとを
 追おつて行くから。」かう泣なきなから、ジャックはいつ
 て、薔薇ばらを懷中ふところから出して湖水うみづの中に投なげ込みました。
 さうして自分じぶんもつゞいてあとからとび込こまうとしま
 すと、ふしぎなことに、投なげ込んだ薔薇ばらは見る／＼
 美しいイリユースカのすがたに變かつて、湖水うみづの上うへに
 すつくと立たちました。ジャックは氣きのとほくなるほ
 ど喜よろこんで、とぶやうにして湖水うみづの真中まんなかからイリユ
 スカを抱かかへて岸きしにつれて戻かえりました。二人ふたりはどんな
 にあふれるほどの幸福しあわせを感じかんじたでせう。
 仙女せんじゆたちは、生いき返かつたイリユースカをこの國くにの
 女王じゆうじやうにしました。ジャックをこの國くにの王わう様にしまし
 ました。かうして英雄えいゆうジャック・ポブコルンの廣ひろい／＼
 世界せかいの旅たびはおしまひになりました。(なほり)

鳩はとの小母おとさん (推薦)

齋藤溪泉

鳩はとの小母おとさん

どこ行くの

二町横町ふたちょうよこまちに

飯買いひかひに

嬢ぢやうやも泣なくから

つれておいで

ばつた (推薦)

鷹田守一

ぐづつき人間にんげん

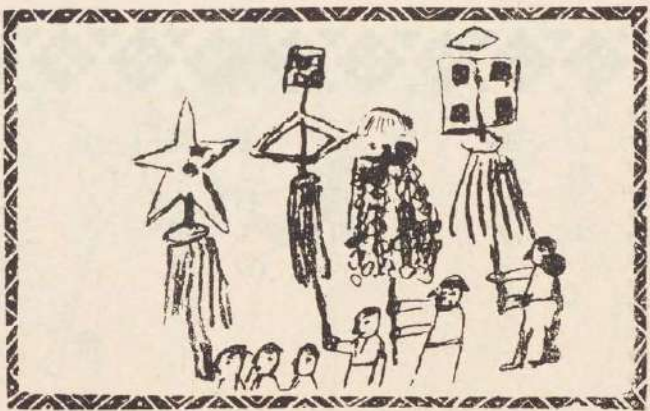
ばつたかネ

チヨンとはねては

またはねる

ぐづつき人間にんげん

ばつたかネ



「萬燈と纏」(賞)

東京府杉並村高圓寺 長野 英夫

童謡

野口雨情選

雪糺

東京市麻布區 沖夢の人
櫻田町八五

細い一本道

シヤン／＼シヤン

曲つた一本道

シヤン／＼シヤン

雪糺 小糺で

シヤン／＼シヤン

雪 蟲

福島縣郡山町 太田 國藏
郡山銀行内

雪蟲 雪蟲 雪おくれ

吠ではかつて雪おくれ

わたしに一杯

雪おくれ

凧 凧

つんぬいた

東京市外 加藤 辰
田端三五一

隣の屋根 つんぬいた

天の天の天邊で

おれの凧 生きてるぞ

木の葉

旅順口 林 夏笛
青葉町四一

木の葉が たまれ

一杯 一杯 たまれ

雀の宿を作つて遊ぼ

こぼろぎ

東京市牛込區 武田 多喜子
南山伏町七

私の父様 どこいつた

私の母様 どうしてる

わたしは獨でコロ／＼

ちくたく／＼コロ／＼

ひとりほつちでコロ／＼

木

新潟縣 羽賀 泰藏
南魚沼郡浦佐

今年生れた お山の木

かつさなく お山の木

こぼろぎ

佐賀縣神埼郡 高野 千秋
城田村神水川

朝から晩まで鳴き通す

何が悲しい こぼろぎさん

お腹がへつたら飯あけよ

お水が欲しくばお湯あけよ

御大將

東京市麻布區 四宮 勝
斧町五四

しんしのお弓 お箸の矢

サーベル下けて

お鍋のお馬

坊やお家の御大將

船

廣島縣賀茂郡 新谷 義晴
志和州村

白い帆 黒い帆 帆かけ船

帆柱三本帆かけ船

鷗のお翼も帆かけ船

帆かけて／＼飛んでつた

「雪達磨」(賞)

東京府品川小學校春二 大木 榮三



寒さが来るから 帽子被れ
豆 摺
東京市牛込區 望月 保治
喜久井町二〇

摺白廻して豆摺ろか
大豆 小豆 一升摺ろか
鳩のあか兒に 乳のまそ
蝗

長野縣西筑 高橋 庚志
摩田立村

水霜 小霜 霜とけだ
蟻のはりつけ動かない
追つても

動かない

川

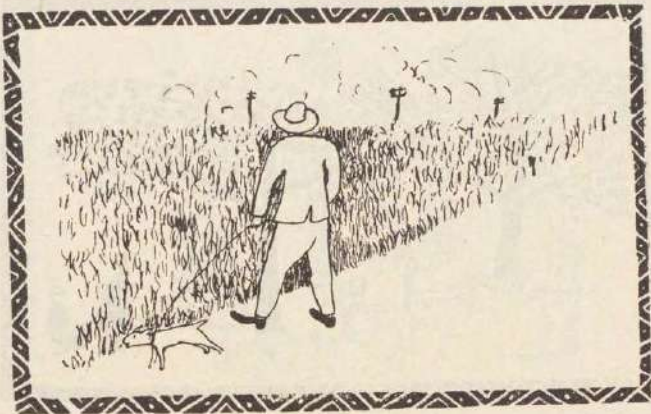
東京府下小松 南 章太郎
川町中平井

金の波 きら／＼

銀の波 きら／＼

川の川の中に

お月さま流れた



「犬をつれた人」

神戸市湊川小學校本五 宇野 日出彦

日向葵

東京府下代々 西山 春雄
木初臺六三五
あつちのお庭 こつちのお庭
どつちが好きなの
日向葵さん
日向葵さん
内所でお話し 日向葵さん

目白

愛知縣知多郡 近藤 九葉
大高町高見
チン／＼飛んだ目白の子
夕日の森は寒いぞ
家に歸つて火にあたれ

眼鏡

長野縣下高 丸山 久雄
井郡中野町
金の眼鏡は 金魚の目
銀の眼鏡は 銀魚の目
目高もかじかも 銀魚の目

鍛冶屋

山口縣山口町 横尾 緑
圓政寺八八

カッチンな カッチンな
も一つしつかり カッチンな
真赤な餡餅だ そらたたけ
小父さんお顔も真赤だい
ベントンコーだ そらたたけ

星

奈良縣奈良市 大日 庄三
西新在家町

あの星

びかり
この星
びかり
空一面に
びかり／＼
びかり

馬

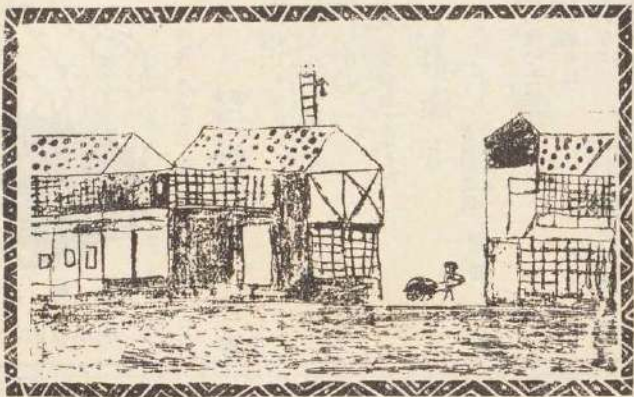
樺太大泊桑町 田口 信一

馬はバツカ／＼

ヒヒンガヒン
裸で跳足で
ヒヒンガヒン

「半鐘」

長野縣伊那小學校本三 牧田 新助



綴方

編輯部選

幼時の思ひで(賞)

三重縣東新橋 藤井 すへ
小學校六年
尋常一年生の夏休みであつた。私
と龜井さんとは、部屋風の通の良い
所で、課題を書いた。其の日の
仕事もすんだので、龜井さんは「お
すちやん行つて」といはれたので、
私は「はい行つてあげよう」と云つ
て出かけたが、休みの事であるから
朝も顔を洗はなかつた。それで顔を
洗はうと思つて、つるべ桿を下して
水を汲んで、上げやうとしたら、桿
は向ふの方へ行つて、私は井戸の中
へ落ちた。上では龜井さんが「叔母
様おすちやんが、井戸へはまりまし
た!」と、驚いて云つて呉れたらし

い。やがて誰かが走つて来る様な音
がするかと思つたら、お父様であつ
た。お父様は井戸をのぞかれて私に
桿を持たして下さつた。そうして「少
し待つていなさい」と云はれて、上
で桿を持つて居られた。又少したつ
と今度は二人走りよつて来る様な音
がするので、私は誰かと思つたら、
お母様と東の庄太様とが長い梯子を
持つて來られた。私はどうされるの
かと下で見て居ると、それを井戸の
中へ入れて庄太様が、梯子から下り
て來て、そうして私を抱いて、上つ
て下さつた。私はこわいのや寒い
やらで、ブル／＼ふるえた。そうし
て着物を着かへて、家の中へ入ると、
兄様は「おす顔をどうしたのだ」と
云はれたので、鏡を見ると、なるほ
ど傷がついてゐた。すると、お父様
は「おす」とあびしたのう」といつて
笑はれた。長い間まだ身ぶるえが止



幼年詩 若山牧水選

キユツビイ(賞)

東京府高田村 岡 毅 爾
第二小学校尋二

森の中でキユツビイが
ひよこひよこして
聞いたならば
お金を堂銭なくなした

往來(賞)

若狭國高濱 胡間 六郎
小學校高一

雨の降つた朝は
人の通りは
少ないなア
佛様のお花うりさん
一人二人きり

繪も及ばない解かなきれいな景色をうつし
出してあります。(牧水)

風車

長野縣津 倉島とめよ
小學校高一

あつち、こつちに、
ガラーン——。
ゴロン。
何かと見れば
風車。
一面にきいろい、
田の中に。
三本ばかりの風車
ガラーン、
ゴロン

評、ガラーン、ゴロンといふ調子がほんと
うに心から出てゐてよく響きます。(牧水)

つばめ

福岡縣京都 桑野 重子
郡行橋町

チクチク鳴いた

ますブル／＼ふるえてゐた。今でもその
事を考へると、おかしいやら、こわいや
らで、胸が一ぱいになる。

ガラス戸

慶應義塾 龜井 孝
幼稚園一年

僕が手紙を出しにいかうと思つて、ガ
ラス戸をあげようとすると、血のやうな
ものが、スリガラスについてゐました。
僕は「何だらう」と思ひましたけれど、お
母さまのおつしやつたことを、きかない
といけない。」と思つて、そのガラス戸を
あけました。すると、ガラス戸は白くな
つてしまひました。「おかしいぞ。」と思
つて、むかうを見ると、にはのさきに、
おひなさまの、赤いもうせんがかけてあ
りました。

徒歩競走

朝鮮大邱公立 森山 新光
第一小学校六

出發點にならぶ。からだを少し前にか

がめると、胸がどき／＼騒ぎはじめた。
「いや腹力を養へと修身でならつた。よ
し／＼一等ビリになるものか。」と、思つ
てゐると松添先生が「用意。」とおつしや
る。間もなく「ズドン」と鐵砲がなる。

五週ならゆつくり走れと思ひながら、
皆の後からついて行く。笑はれはせんか
と心配したが、一週は無事に終る。前か
ら二週目から走るときめて居つたので、
力を出して走りだした。見る間に三人追
ひ越した。今度は鷺巢君だと思ひながら
すぐ後まで追つかけた。すると鷺巢君は
スーッと逃げる。又追つかける。逃げる。
三四度したがどうしても追ひ越せない。
そのうちにだん／＼決勝點は近くなる。
おや／＼と思つてゐると 鷺巢君との間
は大分へだたつた。こいつといひながら
走つて行くと、すぐそばまでは来たが殘
念、たうとう決勝點についたのだ。
前から數へて見ると、八等であつた。

しようざ

兵庫縣口吉川 土居 忠
小學校尋五

日のあたらないえんがわで、祖父さん
と兄さんがしようざをしてをられる。
祖「こうゆくと、むこぶがこうくる、よ
しッ」とおぢいさんは、こまを動かせら
れた。兄「なにッ、こうきたか、そんな
らこう行かう。」祖「うん、えらい所へき
たな、こう行くとこうくる、悪いなあ」
とつぶやきながらこまを前へつかれた。
兄「そうきたか、ふーん、こまへくるつ
もりだな。うーん、こまへきられたらた
まらない、こまでさへておかう。」
祖「きたか、よしッ、こちらへまわら
う。」と、又こまをつかれた。それから二
人は、言葉をださず、つゞけつゞけに、
こまを前へついたり、後へひいたり、し
てをられたが、おぢいさんが

「きたか、これをこちらへもらつておこ
う。」と、向ふの金將を、手の中へにきり

入れられた。

兄「しまつた。とられたか、しかたがな
い、こま、つこま。」祖「出したか、
一足おくれた。今度は負だ、ついてや
れ。」兄「よしッ、これでこちが勝ち。」
祖「たうとうまけた。おぢいさんは、殘
念さうにこまを見つめて」としよりはな、
目が不自由でうまく行かぬ。」
といつて出て行かれた。兄さんは笑ひな
がら、こまを袋へ入れはじめられた。

妹がわたら

東京市入谷 川田 フミ
小學校尋五

私の妹は五つの時亡くなりました。
妹の名前は喜美でした。喜美が生きて
ゐた時分は、私は妹がなればよい
と思つてゐました。けれども妹がなくな
つて見ると、妹がゐたらどんなにうれし
いだらうと思ひます。

私は喜美が生きてゐた時は、妹がなん
だかにく／＼つてなりませんでした。妹が

とんできたつばめ

南からやつてきて

日にてらされて

せなかのまつ黒い

小さいつばめ

チクチク鳴いた

チクチク鳴いた

チクチク鳴いた

評、燕を可愛がる心持が判ります。(牧水)

足のおそい蟻

下關市清和園 川村 きみ

庭のかきの木の木の下で蟻が三匹あつまつて

おにごっこをしてゐた足のおそい蟻よ、

わたしだつたら一足だわ。

評、蟻が言ひました。ふみつぶしてはいや

です。(牧水)

明るいなア

愛知県小橋 川口 光

カチ／＼山の山奥で

タメきの爺さんの背なかは

ほオほオはオ
十五夜お月さんは
明るいな。

自動車

福井市 石森 晋

ブウ／＼走る自動車

田舎のお爺さん

驚いた。

天神河原で

北長狭五丁目 藤田 康平

天神河原で石ひろた

まあるい石やベチャンコな石や

それから股でかごあんで

妹の土産に持つて歸ろ

きのふの雨で

ひよつくりこと

出て来たきのこ

かはいいかさを

頭にのせて

一人ほつち。

大阪府今宮 田原 勝利

第三小学校高一

きのふの雨で

ひよつくりこと

出て来たきのこ

かはいいかさを

頭にのせて

一人ほつち。

近所の人々にかはいがられてゐるのが、私にはねたましいのでした。家の者でもお使に行く度に、何かお菓子を買つて来て喜美にやるのが、私には不平でたまらなかつたのです。時々私は喜美をおだててお菓子を食べてはおばあさんにおこられました。おばあさんは喜美ばかりかはいがつて、ちつとも私をかはいがつてくれない、いやなおばあさんだと思ひました。喜美がゐるなければ皆が私をかはいがつてくれると思つてゐました。ところが妹がじくなつた時私ははじめて目がさめて今迄喜美をにくんだりいじめたりしてゐたのは、まことにすまなかつたなと心から喜美のしがいにあやまりました。喜美が死んだ後は何だか家の中がさびしくなつてしまひました。今妹が居たならば、私は本當にかはいがつてどこへでも妹を連れていつてやらうと思ひます。

演習を見る

見ると、騎兵が三十人許り砲負つて汗みどろで駆けて来て、私達を追ひこして行つた。練兵場には大砲が六門あつて兵隊が盛にすどん／＼と撃つて居て、戦場の様でありました。大砲はばあつと火が出る、ズドンと大きな音がするので耳に手をあてました。大砲の撃つのが止むと敵が見えました。機關銃が間断なく發射されて直ぐ傍まで敵が来ると、兵士は鐵砲に劍を付けて突き進みました。すると休戦らつぱが鳴つて終りました。

あらし

東京市本郷區本 植松 千代子

「三時頃暴風雨がある」と、よるのうち明けいさつから言つて来た。私はいつもより早く床についたが中々ねむられぬ。妹はすや／＼ねむつてゐる。雨はますます／＼降るばかり、母は「いよく／＼ほんとのあらしになつて来たね」と仰つた。私は読みかけの雑誌をそつとふせた。

長野縣松本市 横澤孝子

ズドン……ズドン、ズドンと大砲の音が聞えた。兄さんは兵營の向ふで演習

八月七日晴(繪日記)

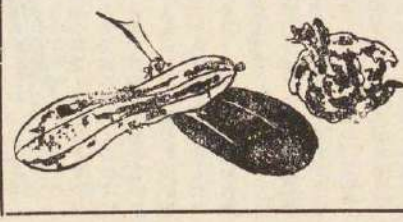


今日はあまり暑くてしやうがないのでお母さんにねだつて水のみました。

をして居ると言はれたので、私はさうりをはいて外へ飛び出すと、隣的美代さんが「私も見に行く」と云つたので二人で練兵場の方へ飛んで行きました。後から馬の飛んで来る音がしたのでふりかへつて

とつぜん下で「雨がもつて来る」とどなつた。急いで下りて見ると、かさのわきから雨だれがほたり／＼降ちてゐた。女中はあはて、金だらひで受けた。

八月十四日雨(繪日記)



海水浴に午後それからしや生しました。雨にふられてしまひました。とろろを家でとりました。茄子一つ三錢、瓜一つ三錢、お母さんがおどろきました。京都のお友だちから手紙が来ました。静岡 鈴木如子



通信

童話の選後に

野口雨情

童話には、ほかのどの文藝にも見る事の出来ない童話獨特の気分があります。この気分が缺けてゐる童話は、わうちなしの童話で、ほんたうの童話といふことは出来ません。よい童話になればなるほど、童話獨特の気分があふれて来ります。理窟をならべた童話、滋味の乏しい童話、無理な言葉をつかった童話には、どうしても童話気分が出て来ません。童話作家は、無邪気に、理窟なしに、どこまでも無理な言葉や句調はつかはぬやうに心がけて下さい。本號推薦の斎藤深泉さんの「鳩の小母さん」のおしまひの一聯「籠やも泣くから、つれておいで」は氣に入りました。藤田守一さんの「ばつた」は、童話の傾分を意



讀者通信

得されたよい作だと思はれました。當然推薦のれうちのあつた作に長野桂子さんの「蕨草」がありました。秋の朝(三浦榮次君) 赤提燈(小栗安藏君) 稻(賤機多味男君) 赤い花(大町とき子) 睦木鳥(大西貞雄君) 小供さん(千坂正次君) 毛蟲(塚本篤雄君) オチ(秋山英一君) 家鴨(岡江花君) 化け芝(庭山義雄君) 孤のジョンニ(横尾毅君) 煙草(泉惣一君) 泣き蟲(須藤逸郎君) 狐火(木下右治君) コンロ(長野昌水君) 坊やお池(稻垣ひろし君) 螢(林青花君) 板島の引越(千葉逸郎君) ひぐれ(水谷清君) 氣にかゝる(池谷としを君) オチとタマ(赤呂木健夫君) 裏山きづね(島山彪君) 栗(大塚魚城君) 星(萩原信夫君) 葉鶏頭(宮一秋君) お供へ(加藤証吾君) むかで(木浦榮雄君) つばくらめ(吉野助三君) 荷馬車(小川けい地) どんぐり眼玉(狩野鐘太郎君) そのほか天江登美草君鈴木寺四郎君のよい作でした。

綴方を見て

選者

今月もなかく、よい作がありました。藤井さんの「幼時の思出」と龜井さんの「ガラ

▲私は六月から御誌を愛讀して居ります。母上が町から金の船の六月號をかつておいでになり風がはりな美しい表紙をつくつくしいさしみたけになるおもしろい話立派な話のかずかすあるのを見て大へんかんしんしました。私もこれかられつ心にと書なさせていただきます。(臺灣 重松品也)

▲重松さん 投書には一つ、住所、學校、學年、姓名、などをしるして下さい。それからいろく投書を送封してもよろしい。(記者)

▲朝早く金の船が参りました。私はうれしくてご飯もたべずに読みました。そこへ友だちが来ましたのでしよに、岡本先生の「誰が一番利巧でしよ」といふのを讀んで考へました。そして春雄さんが利巧だと二人とも思ひました。(宇都宮 竹内とし子)

▲私は金の船の童話を愛讀してゐるものですが、野口雨情先生の童話に關する書物があり

ス戸」の二作が大變に氣持のいいものでした。朝野大邸小學校の森山さん達数名の人の作や土井 忠さんなどは勿論いゝものです。しかし前にあげた二作の方が感じ方がすなはで、無理に作つたといふ跡もなく、いき／＼とした氣持がされました。

「幼時の思出」はながく忘れない程の強い経験だけに、作者の感じ方が深いので、従つてそれを書いた文には人をひきつける力があり

金の船誌友募集

ました。龜井さんの「ガラス戸」にはなんともしないゝ處があります。短い文ですが、一言の無駄もないと言つていい位で、幼い人らしい本當に純な處があつて、新鮮な果物を食べるやうないゝ氣持の作です。年がいかない人だけに物に感じる力がすなはで、目に映つた事だけをそのまま單純に表すためにいい氣持が出るのです。かういふ人達からは複雑な面白味を望む事は出来ませんが、書き方としては申分ないゝ行方だと思ひます。

川田さんの「妹がゐたら」にも同じやうないゝ處がありました。文を書く上に何よりも必要なのは、物に感じる力が深く、すなはで、いつはらずにそのまま書く事だづく／＼感じました。大邸小學校の森山さんの「徒歩競争」では決勝點に入らうとする時の心持ちを寫した處が大變によく書けてゐました。その他同じ學校の釜瀬さん、武尾さん、小副川さん、それから土井さんの「しやうぎ」など何れも達者な作でした。

誌友にはいろ／＼な特典があります。希望者は金の船編輯所宛に申し込んでください。

金の船消息

▲本居長世先生の作曲發表會が十一月の第四土曜日に東京丸ノ内の有樂座に於て盛大に開かれました。

▲第二回東京童話會 十一月七日(日曜)午後一時より第二回目の金の船東京童話會が四谷區舟町三番地都築病院の三層樓上に開かれました。本誌からは岡本歸一先生と野口雨情先生とが出席されました。岡本先生が

▲自由畫掲載外、佳作 ▲妹 大阪 近藤翠△

童話劇と童話音樂會

少年少女諸君が待ちに待つた金の船主催第二回童話劇と童話音樂會は十一月二十七、二十八の二日間麹町丸の内保險協會で開かれました。その日はどんなに盛會であつたか、少年少女諸君がどんなに喜ばれたか、次號の誌上に寫真を入れてくばしくお知らせします。

ら少年少女雑誌の挿畫と童話といふ有益なお話がありました。野口先生は一般童話界についての感想を述べられました。どちらも童話作者に有益なお話でした。當日は上京中の三木露風先生も出席される筈でしたが、病氣の爲に缺席されたのでした。第三回目の童話會は十二月中旬に忘年会を兼ねて盛大に行はれることになって居ります。どなたでも出席は自由ですから希望の諸君は常任幹事の前記四谷區舟町三番地都築益世氏宛にお申込みを願ひます。尙、本會の基礎を強固にするために都築益世氏の外に大沼廣、加田愛咲、山田京一、鷹田守一、佐藤盛二、芳香信愛、黒田光明の諸氏が本會の委員に推薦されました。當日互選の結果高點を得た童話は石切(都築益世)夕蘭(長谷川良夫)、黒猫小貓(山田邦臣)はつくりさん(大沼廣)かまきつちよ(鷹田圭雄)つばめ(芳香信愛)尖題(狩野鐘太郎)たそがれ(坂田露香)の諸篇でありました。出席者は、大沼廣君、大西貞雄君、岡本先生、小山夢雄君、黒田秋哉君、狩野鐘太郎君、佐藤盛二君、坂田露香君、齋藤淡泉君、須藤逸郎君、都築益世君、都築爲世君、鷹田守一君、野口先生、長谷川良夫君、藤門逸風君、芳香信愛君、山田京二君、吉本明光君、渡邊給男君

新しく出た本

◇驢馬の皮(ヘロル作・楠山正雄氏譯)ヘロルはフランスの人で、一ばん早くから童話を作つた有名な人です。グリムでもアンデルセンでも、みんな此の人を先生にして童話を作つたと言つていゝ位えらい人です。驢馬の皮にはヘロルの作つた名高いお話ばかり集めてあります。眠りの森の女王「青髯」親指さん「サンドリヨンの話」——など、何れも世界になりひいてあるお話です。楠山先生がどんなに面白い童話をかゝれる方が「金の船」で御存知の通りです。こんな面白い本が出来て嬉しい事です。菊判二〇四頁定價一圓卅錢半込津久戸町家庭讀物刊行會發行)

◇チルチル・ミチル(山村暮鳥氏作)山村暮鳥先生のお書きになつた新しい童話集です。そこにあるお話は皆詩のやうなお話です。そしてどの頁を開けても愛が満ちてあります。發行所 麹町區洛陽堂定價壹圓九拾錢)

◇鈴木善太郎先生の童話集「迷ひ子の家鴨」は大變に好評を博しまして、近く全部賣切れにならうとしてゐるさうです。まだ讀まない方は直接發行所の半込神樂坂文泉堂へお申込みになつたが御便利です。

「金の船」おとぎ會の新計畫

今年から「金の船」ではおとぎ會を組織して皆さんを喜ばせたいと思つて、今切りと計畫をしてあります。これまでのありふれたお伽會でなく、他では出来ないやうな大仕掛けな面白い會をつくる積りです。凡そ一年に六回位一ヶ月置きに開いて、春と秋には大會を開き、やがては東京以外の各地でも催したいと思つてあります。何れ計畫がすつかり出来次第御知らせいたします。

クリスマスと新年の贈物に一番よい」

「金の船」合本

再製出来

- ◆第一輯 (第一巻第一號より第二巻第四號まで六冊合本) 定價壹圓五拾錢
- ◆第二輯 (第二巻第五號より第二巻第十號まで六冊合本) 定價壹圓八拾五錢
- ◆「金の船」合本 世界名作童話集 定價 參拾五錢

(何れも部数に限りがありますから賣切れないうちに急にお申込み下さい。)

會社 大分 三好英雄△グレットカキ 東京
長野英夫△門 朝鮮 長友スガ△風景 同
平原嘉胤△木登り 同 森井弘一△ふうせん
賣り 福井 胡問六郎△花瓶 同 廣澤和雄
△けしき 同 松澤利美△隣の二階 窪田章
一郎△富士山 大阪 稻垣勝孝△櫻島 鹿兒
島 中村健次△電車 神奈川 豊任芳造△か
き方の道具 東京 高橋美佐子△肖像 福井
石森晋

▲幼年詩掲載外佳作 △雨 崎玉 宮崎鐵也
△風 福井 山守勝彦△秋の夜 兵庫 藤原
栗△秋の日 大阪 州田太郎△幸 大阪 宇
野秀造△親なし犬 宇都宮 竹内とし子△樹
の葉 長野 田中菊三△馬車屋 兵庫 久米
勇△勉強 群馬 三木了△置時計 大阪 池
田郁三△夏の田舎の夜 東京 菅野圭介△窓
から 愛知 大井繁一△百舌鳥 東京 石橋
鼓堂△豆の演習 和歌山 井畑一男△いやし
んば島 和歌山 板坂義雄△夕暮 兵庫 澤
井重雄△とんび 兵庫 小山悦治△つじうら
賣り 福井 魚住隆三△行水 和歌山 青柳
好一

▼綴方掲載外佳作 △お祭り 山梨 土橋都
子△お花屋 東京 村上政枝△自動車 福井
一瀬三郎△夜店 朝鮮 武尾健藏△武尾君

朝鮮 釜濱虎雄△朝の出来事 福井 胡問六
郎△寒い夜 福井 鳴戸正直△晩秋の夜 臺
灣 重松晶也△夕方 東京 大塚甚兵衛△月
の夜 東京 小林彦之助△さのこがり 大分
三好英雄△休暇中的一天 京都 高城光治
△入るん 横濱 小林チエ△遠足の朝 東京
松下春三△不思議 朝鮮 小副川美恵

▼金の船読友 ○兵庫 市毛豊備君○青森
易國間小學校○東京 松平元子○大阪 北中
巖藤君○茨城 大串章君○朝鮮 河田松君○
千葉 須藤倉松君○山口 木浦圭亮君○横濱
シーバードン君○臺灣 内野定樹君○岐
阜 川田卓君○大分 三好英雄君○京都 細
見津る子○大阪 大塚一雄君○長野 細田つ
た子○長野 塚本光雄君○大分 楓江小學校
○長野 福原政市君○徳島 宮本三知男君○
北海道 大橋榮敏君○神戸 宇野日出彦君○
東京 水野水佑君○東京 竹川佐登志君○大
阪 菅歌子○東京 千葉春洋君○栃木 小林
彦之助君○岩手 齋藤賀夫君○徳島 岸本爽
君○和歌山 角矢今雄君○岩手 龍見せつ子
○山口 横尾縁君○兵庫 片岡長四郎君○福
井 石森晋君○福井 石橋周一君○福井 胡
問六郎君○宇都宮 武内とし子 (以下次號)

謹賀新年

一月元旦

岡本 歸一
横山 壽篤
野口 英吉
山本 作次
齋藤 佐次郎

少年少女の創作募集

(原稿は東京府下田端三五一番地「金の船」編輯所へ送つて下さい)

自由畫 山本鼎先生選

自由畫は、お手本や雜誌の畫なんか見ずに、花なり、景色なり、動物なり、お母さんの顔なり、なんでも好きなものを、かつてに描いて下さい。

幼年詩 若山牧水先生選

幼年詩は、山なり森なり花なり、何でも見たり感じたりしたことな、みなさんの好きなやうに詩にしてください。

綴方編輯部選

綴方は、みなさんが見たこと、思ったことな、そのまふだんつかつてある言葉で書いて下さい。

童話童謡募集

毎月童話童謡を募集いたします。題材は作者の自由ですが、内容も形式も、藝術味があり且つ子供に喜ばれる面白い作品に限り、童話は二十字詰百行内外、童謡は二十行以内、優秀作品は本欄に掲げ相賞料を差上げます。童話は野口雨情先生選、童謡は編輯部でいたします。

(本誌に限り三十五銭)

定價 一冊三十銭 送料壹銭
三ヶ月分三冊(送料共)九十銭
半年分六冊(送料共)壹圓八十銭
壹ケ年分十冊(送料共)三圓四十銭
(但新年號その他臨時號には値上げの代金だけ申受けます)
振替口座東京〇五七貳番

▽御注文は必ず前金で御拂込み下さい
▽送金は小爲替でも切手代用でも宜敷う御座います
▽切手代用は(壹錢切手)一割増に願ひます
▽御注文の場合は第何巻第何號よりと云ふことなはつきり書いて下さい
▽住所姓名は丁寧に分りよくお書きください

東京府下田端三五一番地
「金の船」編輯所

大正九年十二月四日印刷納本(毎月一回)
大正十年一月一日發行(一月一冊)

編輯人 齋藤 佐次郎
發行人 齋藤 佐次郎
印刷所 東京府下田端三五一番地
印刷所 東京府小石川久米町八百八番地
印刷所 東京府小石川久米町八百八番地
印刷所 株式會社博文館印刷所
東京市麹町區飯田町六丁目二十五番地
發行所 キンノツノ社

來れ!!自由の灯のもとに

闇黒を照す光明!! 獨學者を導くもの唯本會有るのみ。

創立以來十八年、今や名實相作の大日本國民中學會の八字は如何なる山村僻地へも知らざるもの無かるべし。將來成す有らんよる青年は躊躇するところなく本會の門に來れ!!



會長 尾崎 行雄

學監 遠藤文學博士

學監 山内理學博士

顧問 井上博士、浮田博士、三宅博士、河渡戸博士、岡田前文相。

講義録見本つき規則書申込み次第進呈す。

規則書には諸君の爲め最近に於ける本會會員の友の奮闘を添よ!!

東京 神田 駿河臺

大日本國民中學會

振替 東京四二〇〇番

電話 神田 田田 三三三 〇〇〇 〇〇〇 四番番

大正八年十月十六日 大正九年十二月四日印 刷 本
大正十年一月一日發行 (毎月二回一日發行)

東京 キンノツノ社 發行

百料全書を兼ねた(大正十年)

ライオン當用日記

(四六判總クロス体裁最も優美 定價 金一圓二十錢也 送料地方十錢市內六錢)

ライオン齒磨本舖廣告部
東京本所區外手町
振替口座東京四八三五五

謹賀新年

大正十年一月一日

ライオン齒磨本舖 株式會社 小林商店
東京 大阪 名古屋



ライオン磨齒